



第1回 「プレシャス」

—性的虐待を乗り越えて生きる—

川崎 二三彦

(子どもの虹情報研修センター)

世間にはあまり知られていないが、マスコミ問題に鋭いメスを入れる気骨ある雑誌「放送レポート」は、私が愛読し始めてからでもすでに20年以上になる。この中で真っ先に読むのが、長らく連載されている「映画の中のマスコミ」。筆者の加藤久晴氏は映画におもねることもなく、この雑誌らしい切り口で批評を続けている。だったらこんなふうにして「子ども」をキーワードにした映画評を、誰かどこかで書いてくてもいいのにな、と常々思っていたところへ、Web マガジン企画の案内をいただいた。

「映画は好きでよく観ているが、まともな映画評が書けるわけではないし、最近は観てもすぐに中身を忘れてしまう。だが、そんな自分を戒める意味もこめて、試しに『映画の中の子どもたち』とでも題して何か書き綴ってみようかな」、一瞬、こんな気持ちの私の脳裏を掠めたのが(つまり読者の皆さんの)運の尽き、かも…。

この映画、まず何と言っても主演を張った新人女優ガボレイ・シディベの存在感に、いや元へ。“存在感”じゃなくて“存在自体”に誰しもが圧倒されてしまうだろう。何しろスクリーンを一人で占領するかのようなボリューム。原作小説でも、主人公のクレアリース・プレシャス・ジョーンズは、90キロまでしか計れない体重計の針が振り切れる重量があるという設定だから、まさに本作品に打ってつけの俳優



なのだ。おそらく彼女でなければずい

ぶん違った印象の映画になったのではないだろうか。観た映画をすぐに忘れてしまう私も、多分この俳優のことは忘れないと思う。

それはさておき、観ていてこちらが息苦しくなる映画だった。小説の原題は“Push”というのだけれど、この言葉、出産シーンでは「いきむ」という意味で使われているらしい。実はプレシャスは、わずか12歳で自分の父親の子を孕み、出産し、さらに16歳になってから、この父の2人目の子どもを妊娠しているのである。そして、おおかたの予想どおり彼女の母が彼女を守るわけではない。むしろ逆だ。

「プレシャス・ジョーンズ、よくも私の亭主とファックしてくれたね、この汚らしい淫売娘！」

母は毒つき、児童福祉業務に携わった者が多かれ少なかれ経験するように、役所が支給する娘とその子どもの養育費を

当て込んで生活している。

「さいしょは、あたしのでえしゅをぬすんで！　こんどは、手当をだいなしにして！」

俳優の顔も名前も覚えられない私は、母親役を演じたモニークについても全然知らなかったのだけれど、その体軀を主役のガボレイ・シディベと思わず見比べてしまった。彼女に勝るとも劣らぬ堂々たる姿で、憎々しくかつ哀しい母親を熱演、好演。児童相談所で出会った何人かの母親の姿が次々とダブってしまうのは、決して私一人ではあるまい。モニークはもともとコメディアンらしいが、本作で主演女優賞や助演女優賞を数多く獲得したこの二人が、映画に独特の雰囲気醸し出している。



ところで、児童福祉司の経験を持つ私にとって見過ごせないシーンがあった。ある日の面接で、ソーシャルワーカーが席を立ったわずかな隙に、プレシャスが自分のケース記録を持ち出すのである。

「ファイルを盗むというのは……」

「レイン先生、あのファイルを盗まなかったら、あたし、自分がどんな問題をかかえているか、わかんなかったよ！」

このシーンを観ていて血液がかすかに逆流するのを意識しながら、私たちの間でも知らず知らずのうちに似たようなことが生じていないか気になってしまった。ただしファイル管理の問題ではない。長年の勤務の間に児童記録票紛失という

問題の解決を迫られたことがなかったわけではないが、そうではなくて、相談を受けている側が子どもや保護者をそっこのけにして勝手に方針を決めたり、あるいは決めた方針をまともに説明せずに済ませていたりしてはいないかということだ。

幼年期から続く実父による性的虐待だけでなく、実母のひどい仕打ちや、さらに過酷な事実を引き受けねばならなかったプレシャス。現実世界で本当にこんなことがあるのだろうか、と一瞬目を背けたくなるけれど、原作者のサファイアは、映画の舞台となったニューヨークハーレムで10年間、若者たちの教育に携わっていたという。

「教えているときに会った子たちの中には、HIVに感染した子、父親に虐待されていた子、文盲の子、様々な状況の子供がいました。それらの子たちが集められて“プレシャス”という一人の少女になりました」

インタビューで彼女はこう語っているが、私たちが生きるこの社会の一断面を、紛れもなく鋭く切り取った映画だと言える。

とはいえ本作は、単に現実の厳しさ、酷薄の運命を殊更のように見せつけるだけの映画ではない。というのも、アルファベットすら読めなかったプレシャスが、自らの意思で通うことになった代替学校の教師と生徒たちとの生活を通じ、自らの人生を自らの足で歩もうとする姿を中心軸に据えているからである。見終わって希望を感じることもできる映画、それが「プレシャス」だ。

(鑑賞データ：2010/04/24 TOHO シネマズ二条)



第2回 「クロッシング」

川崎 二三彦
(子どもの虹情報研修センター)

『対人援助学マガジン』創刊号は、届いてから全文をプリントアウトしてアットランダムにいくつか読みました。皆さん、なかなか熱が入っていますね。私の連載は、雑誌に彩りを添えるぐらいのつもりで書いているので、何か申し訳ない気になります。それにしても、せっかくの対人援助学会メーリングリストにマガジンの感想が投稿されるかと思いきや、全く見かけませんでしたね。自分のことは棚に上げて、少し残念でした。さて、今回選んだ映画はあまりポピュラーなものではありません。ご覧になった方、ありますか。それとも、「ベスト・キッド」あたりを紹介したほうがよかった？

土曜日の午後、わざわざ JR 川崎駅まで足を運んで観た映画。ところが客席総数は 844 席だということに入場者は 10 数人。北朝鮮からの脱北者を描いた韓国映画だから、やはりこんな暗い作品は入らないのかなと思いつつ、誰に気兼ねするでもなく座席3つ分を独り占めして、それでもまだ足りないと言わんばかりに足を広げて座らせてもらった。

ただし観た人の評判は総じてよい。

「あまりの衝撃に涙するばかりで無力な自分を痛感」

「ものすごく痛くて救いようのない話だけど、これが現実なんだろう」

「クロッシングを観ました。本当に久しぶりに涙腺が完全決壊。映画では初めてと思われる、鳴咽までもりました。最初から最後まで、涙、涙、涙…の2時間でした」

「泣けるという人が多いみたいだけど、泣くことはできなかった。なんともやるせない重い余韻」

「映画クロッシングを見た。…もし彼らを救いにいく義勇軍の募集があれば手をあげるだろう」

最近、映画を観たら帰宅後ツイッターで検索し、同じ日に同じ映画を日本のどこかで観た人のつぶやきをチェックすることにしているのだけれど、こんな声があふれかえっていた。

サッカー選手だった夫が病に伏す妻のため、治療薬を手に入れようと脱北する物語。だが中国に渡っても、現在の中朝の政情からしてたやすく目的を達成できるはずもない。中国政府は脱北者の増加をいやがり、種々の規制を強化しているからである。さて、映画では北朝鮮に残された妻が死に、11歳の一人息子が孤児となる。



「ウウム、こういう場合、北朝鮮ではどうするのかな？」こんなシーンになると、ついつい児童相談所の児童福祉司時代のことが思い出され、泣いてるところではなくなってしまう。何しろソーシャルワーカーは、所与の条件がいかに劣悪であっても、その中で本能的に何らかの解決策を見出そうと思考するものなのである。ところが北朝鮮では、「保護者のいない児童」であっても、児童福祉機関が登場する気配はない。そのまま放置された11歳の息子は、父と会うのだと固く決意し、村や町をさまよい、ついには脱北者の子として子ども向け？強制収容所に入れられてしまう。

北朝鮮は今とても貧しい。しかし日本だって戦前の貧しさならば勝るとも劣らない厳しさだった。事実、大量の飢餓子殺し事件が繰り返され、貧しさゆえの親子心中だって枚挙にいとまがなかったのだから。ただし、当時の日本と現在の北朝鮮で明らかに違うところは、少なくとも日本では、そうした事態を憂い、それを世に問う人が、少数ながらいたことだ。三田谷啓や賀川豊彦がその一例だ。

だからこそ、貧しさという点では共通していても、現在の北朝鮮の子どもたちは、戦前の日本より一層の困難を抱えている。独裁政治の問題の本質はここにあるのだ…、などと言っている間に話がそれてしまった。

この映画のクライマックスの1つは、さまざまな援助を得、かろうじて中国に渡った息子と父とが、やっと実現した携帯電話で話す場面だろう。

「お父さん！」

彼がこう呼びかけた後で発した言葉が忘れられない。

「ごめんなさい、お母さんを守れなくて…」

「男の子はお母さんを守れ」と父に言

われていた彼は、自身が辿った想像を絶する苦難や寂しさを訴える前に、どうしてもこう話すしかなかったのである。後は言葉を継ぎ足すこともできずに泣きじゃくる。やはりまだ子ども。

それにしても不思議とすらいえるのは、これほどの過酷な境遇の中で示される純粹に家族を思う父、母、そして息子それぞれの姿だ。私が感動したのは、もしかしたら、日本では失われかけているとすら感じられる彼ら家族の美しさだったのかも知れない。

(鑑賞データ：2010/06/26 チネチッタ 川崎)





第3回「冬の小鳥」

—子どもの目線でみるとということ—

川崎 二三彦

この11月、新刊2冊をほぼ同時に上梓しました（次ページの最後に宣伝させて貰っています）。というのはよいとして、合計800ページのゲラを繰り返し読んで校正する作業に追われ、映画もほとんど観ることができませんでした。今回紹介する「冬の小鳥」も、東京であった某会議のあと、まさに一瞬の隙を突いて駆けつけたようなものです。でも、無理して行ってよかったですね。観てしまえば、「あの時間がもったいなかった」と後悔することなんて、殆どないですから。

「最後に一時保護所で子どもたち2人と面接した。置かれている状況がまだ飲み込めない5歳の弟と違って、小2の兄は覚悟し、けなげに話を聞くのでこちらも辛くなる。が、そんな感傷に浸っている余裕はない」

「こうして兄弟は児童養護施設に向かった。あらためて施設の職員に事情を説明し、いよいよ彼らと別れる時が来た。

『じゃあ、お部屋に行こうか』

と、声を掛けた瞬間。兄が急にうずくまる。ふと見ると小さな顔は涙でくしゃくしゃ……。それまで必死に抑えていたものが一挙にあふれ出たのであろう」

というような、児童相談所時代に何度も経験した出来事が思わず知らず浮かんできて、胸が苦しくなってしまうのが「冬

の小鳥」の冒頭シーンだ。

映画を観にいくとき、あらかじめ多少の予備知識は持っている。だから9歳の少女ジニが、施設に預けられて生活するというストーリーであることぐらいは知っていた。私にすれば、自らこうした子どもたちにかかわってきたわけだから、決して珍しい話ではない。のだが父と二人、大きなケーキをかかえ、無邪気な様子でカトリック系施設の門をくぐるジニの姿にある種の予感が走り、私の心には早くもかげりが生じてくる。

「あっ、やはり」

「中を案内してもらいなさい」と院長が声を掛け、ジニがシスターに連れられていった隙に、父が黙って立ち去ってしまうのだ。1975年の韓国。

とその時、こんな声が耳の奥で囁いてきた。

「長く働いた児童相談所で、こんなことはなかったと、おまえは本当に言えるか？」

彼らの前に児童福祉機関やソーシャルワーカーは登場せず、父が直接ジニを施設に連れて行き、預けた後は全くの行方



知れずになるのだが、そのような事情に至った理由を、映画はなんら説明しない。あとはもう駄目だ。

「なぜ彼女はここにいるのか、あの優しくそうだった父は、どうして彼女を置き去りにしたのか」

ソーシャルワーカーだった身が忘れられず、つつい事態を把握しようとし、いつまでもそんな疑問に拘泥するので、ともすれば映画の世界から取り残されそうになってしまう。

一方、突然ここで暮らすことを余儀なくされたジニは、すべてを拒絶する。

自分が持ってきたケーキを食べようもしないジニ。「パパはウソつかないもん」と言い張るジニ。ジニを指して「お客さんじゃない、私たちの家族よ」と囁きあう子どもたちの声を聞き、泣き出すジニ。ついに門柱に上り、飛び出そうとして立ちすくむジニ。そしてそして……。

預けられた施設の職員やそこで暮らす子どもたちが、存外にジニを暖かく迎えてくれているのは、観ていて本当に救われる思いがしたのだが、それにしても、次々と映し出される彼女の行動、彼女の姿を見ているうちに、鈍感な私ではあったが、はっと気づくことがあった。

ジニの絶望は、単に父と離ればなれになってしまったという事実にあるのではない。なぜ裏切られたのかということすらわからないという点にある、つまり、自分がこの施設で生きていく意味を、必然性を誰にも知らされなかったがゆえに絶望するのである。

そう考えて、私には初めてこの映画が何を言いたかったのかがわかった、よう

な気がする。映画を観た多くの人が、「子どもの身の丈の高さから描いた作品」だとか、「カメラはジニの目の高さと同じ位置にある」として高く評価しているのだけれど、私にとってそれは、ソーシャルワーカーの立場からではなく、常に子ども自身の気持ちになって考えよというメッセージだったのである。

理不尽な大人の仕打ちを甘んじて受け入れるしかないジニが、懸命に生きていこうとする姿。そのジニを寡黙に、しかし見事に演じたキム・セロン。それらが一体となって、本作を今年の秀作に仕上げたのであろう。

(鑑賞データ：2010/10/17 岩波ホール)

「日本の児童相談

ー先達に学ぶ援助の技」

川崎二三彦・鈴木崇之編（明石書店）

2,400円＋税

7人のプロに聞く幼少時の生活史から対人援助の神髄まで。

「子ども虐待ソーシャルワーク

ー転換点に立ち会う」

川崎二三彦著（明石書店）

2,800円＋税

生きづらさをかかえる現代の家族、児童福祉世界の激変。私が自ら体験し、生きてきたこの時代をまるごと捉え、形として示したいと考えて編んだ480ページ。

著者はできばえに納得。皆様、是非ともご一読下さい。



第4回「その街のこども（劇場版）」

— 悲しみの中から生まれる希望 —

川崎 二三彦

この連載を始める前後から、映画を観る機会がめっきり少なくなってきたような気がしてしまう。現場にいた頃は、多忙なさなかに月間5本、年間50本を目標にして足繁く映画館に通っていたというのに、今はせいぜい月1~2本。単身赴任の身だから、誰に気兼ねするすることもなければ、突然予定を変えなければならぬような業務でもない。ちなみに前回紹介した「冬の小鳥」以後に見た映画は、「小さな村の小さなダンサー」「ふたたび」「ドン・パスクワレ」「シチリア・シチリア」「愛する人」ぐらいかな。ウウム、これでは連載も風前のともし灯…。

“こんな変な体験、あまりしたことないよな”

通勤客でぎゅう詰めの満員電車内。映画を見終えた帰途、窮屈を承知でパンフレットを広げているうちに、上映中はこらえていた涙がいつのまにかじわりと滲んできたのである。主人公美夏の親友ゆっちの父親役を演じた白木利周さんへのインタビューを読んでいた時のことだ。

「私より百倍もええ子やったのに、なんで死ぬんや。震災で、わけわからへん」「ええおっちゃんが、なんであんなにボロボロになるまで苦しみなあかんねん!」



「おっちゃんはや、むっちゃ恐かったから、話しかけられへんかったんや」

などと回想するシーンが続いたあと、マンションで一人暮らすおっちゃんを深夜に訪ねるシーンとなるのだが、「美夏です」と聞かされ、インタホンを通じて応答するその声に、正直言うと、拍子抜けした。“普通すぎるやん”と思ってしまったからだ。が、パンフを見てわかった。この人は俳優じゃなくて市井の人。実人生では、当時神戸大学の学生だった息子を震災で亡くしていたのである。

「もし、おっちゃんの立場だったらどんな想いになるのかなと……。役者でもないし、なんでもないんだけど、震災のことを想うと、瞬間的に、ずっと役に入り込んでいました」

ここで話されているのは、おそらく演技のことではなく、おっちゃんのことだろう。

「震災の傷だけを抱えていたら、おっちゃんと同じような振る舞いをするだろうとは思いますが。でもね、美夏が来ることで、『自分のことを想ってくれる人がいるんだ』ということに気がつくじゃないですか。それまでは誰も来てくれな

かったという寂しさもあったでしょう。でもあの日、こどもの友人が来てくれた。それだけで感激しているはずなんです。私だってあの立場だったら、夜中でも迎え入れますね」

と、ここまで書いてきて思うのは、この映画、あくまでも映画であり、フィクションではあっても、そのように割り切って観ることは難しいということだ。美夏と勇治、主人公の二人が被災した時の年齢は、中1と小4に設定されていたけれど、私も思わず計算した。そうだ、うちの息子も震災の時は勇治と同じ小4だった……。

“京都もすごく揺れたよな。前夜は小6の娘の誕生日だったから、ケーキを買って祝ってたんだ”

“震災当日は京都府の児童福祉司会議だった。セッションが終わって皆でテレビの前に駆けつける度に、被害が広がっていったよな”

震災15年目の前夜、新幹線・新神戸駅で偶然出会った二人が神戸の街を歩いて行くうちに、次第に心を通わせていくロードムービー。なんだけれども勇治の語り口調が、また語彙不足としか思えぬような言葉の選び方が、やたら息子のしゃべりと似ているので苦笑してしまう。

それにしても、人が自分に対して、あるいは自分が心にとどめていることに対して素直になり、それを開くためには、“時”が必要であり、また“場”が必要なんだと、改めて思う。子ども時代の震災体験を、彼らはたぶん忘れようとし、どこかに閉じ込めていたはずだ。ところが、二人が出会った時と場所が、少しずつそれを溶かしていく。そして最後のシ

ーン。“追悼のつどい”が行われる東遊園地にたどり着き、別れが迫って勇治が握手を求め、美夏がそれをさえぎって抱き合う場面は、何ということはないけれどジーンとききましたね。

＊

私はテレビドラマを殆ど見ないので、この映画が、震災15周年となる2010年1月17日、NHKで放映されたドラマだったことも、それが絶賛され、今回劇場版として再編集されたということも全く知らなかった。それに主演の森山未來、佐藤江梨子、二人ともが震災を体験していたこと、脚本の渡辺あやも西宮出身で、書き上げるまでに強い葛藤を抱えていたことも、もちろん知らなかった。

とはいえこの作品、震災という体験を別にしても、すごく上質な映画だと私は思う。特に前半部分では、いたるところで思わず噴き出したくなるようなシーンが顔を出して楽しませてくれたし、たった一夜、それも神戸の街を二人で歩いただけだというのに、ラストまでくると、知らず知らずのうちに彼らが何かを得、何かを感じ、そして確かに成長したということが、ひしひしと伝わってくる。そして、おそらくは映画を観た誰もが、そこに生きる希望を発見する……。決して泣けるだけの映画ではないのである。とはいえ帰宅後、ネットでドラマ版の予告編を見ていたら、またしても目頭が……。

＊鑑賞データ：2011//02/08 東京都写真美術館

＊公式ホームページ <http://sonomachi.com/>

＊Twitterへの投稿 <http://coco.to/movie/2225>

第5回「八日目の蟬」

一生い立ちを受け入れる旅

川崎 二三彦



今年は何度か「MET ライブビューイング」に出かけた。ニュー・ヨーク・メトロポリタン歌劇場(MET)での最新オペラ公演を、年間10本あまり上映する企画だ。幕間の休憩もちゃんとある上、その時間帯に客席や舞台裏の様子を映したり、指揮者や演出家、出演者等にインタビューするサービスもあって、時には珍しい話が飛び出すこともある。この前見た「オリバー伯爵」のタイトルロール、フローレスは「いやあ、さっき妻が出産したんです。昨日から全然寝てません。ベビーの顔見てから楽屋に飛び込んだんです」と言うのでびっくり。料金は3,500円、映画にしてはとやや高いが、オペラの疑似体験に裏方ウォッチングを足したような楽しさはなかなか得難いものだ。などと言う間本編開始のベルが鳴る……。

この映画、ほんまは観る気なかったんよね。予告編で「誘拐犯に育てられたとあって、特殊すぎて」なんて台詞を聞かされるたび、「これって集客用のあざとい宣伝じゃないの？」と勘ぐってたから。

確かに「八日目の蟬」とはよくも閃いたもんや。蟬は羽化して1週間で死んでしまう。それが八日目も生きてたら、^{ほか}他の蟬が見ない光景を見るって意味らしいけど、心憎いタイトルですわな。けど、「父の愛人だった誘拐犯に、これ以上ないほど心優しく育てられる」なんて、八日ぐらいじゃとても起こらん。ホントは「十日目の蟬」ぐらいがいいところじゃないやろか。どだい設定に無理があるんですよ。

とまあ愚図愚図言いつつ……、

＊

「お母さん、お星さまの歌をうたって」「いいわよ！」

犯人が逮捕され、4歳になった娘をようやく我が手に取り返した母なら、精一杯「キラキラ星」とか歌いますよ、そり

ゃあ。ところがこっちは早くもため息。次の展開が読めますからね。

「それじゃないの！」

完ペキ想定内でしょ。ご丁寧に後で謎解きもしてくれたけど、娘が望んだのは犯人、すなわち養母がよく歌った「見上げてごらん夜の星を」だった。

そやから母の感情が決壊するのも必然やろね。大暴れですわ。父が必死で止めるけど、もとはとえばこの人の不倫が発端なんやから収まるものも収まらへん。そこへだめ押し。

「お母さんごめんなさい」「お母さんごめんなさい」「お母さんごめんなさい」

泣きじゃくりながら、ただただ謝罪の言葉を繰り返す娘。

「わかった、もうわかったから次のシーンへ進もうよ」

こっちは耐えかねて先を急ぎたいのにこの台詞、永遠に続くかのように感じられましたなあ。ふう、思い出すのも息苦しいけど、それはまあ、ある意味すごい現実感があったから。児童虐待なんかで



も、家族誰もが行き場をなくして追い詰められることって、なんぼでももあるわけやからね。子どもの必死の形相に、母親がますます激高するんはようわかります。それにしても、映画館に来てまでこんなシーンを見なくちゃならんのかねえ……。

＊

ところでこの作品、楽しいところもありますな。追われる身の犯人が子どもと一緒に匿まれる現代風駆け込み寺「エンジェルホーム」のエピソードですわ。余貴美子演じるホーム代表の一挙手一投足に思わず吹き出したけど、いかがわしくて現実離れしているところが、かえってこの映画にはふさわしいんやろね。こういう場面があると、ホント2時間半の上映時間もあつという間。まあ、うまいこと作ってるんでしょう。

それに、突然現れ「事件のことを本にしたい」と無遠慮に持ちかけるルポライターも、なかなかよくできていましたな。本作のテーマの一つは、“特殊すぎ”る生い立ちをいかにして受け入れるんか、ということなんやろと思うけど、もしも

こんなことが実際にあったら、大流行りおおはやの心のケアなんかを標榜しつつ、したり顔で出てくる専門家が必ずいるはずや。

ところが彼女（小池栄子扮するルポライターのことです）は真逆まぎやく。突然待ち伏せして声をかけ、自分本意の関心で突っ走り、アパートに入り込んで勝手に冷蔵庫を開けてムシャムシャ食べ始める。でもまあ、観客を誘いざない物語を進めていくには、多分こういう人物が必要なんやろし、誘拐犯に育てられた主人公恵理菜（井上真央）が、自身が育った土地と自らの生い立ちそのものを旅するためには、きっとこんな役回りの人間がいるんやね。あつ、これって現実でも同じかな？

＊

要するに本作は、「誘拐したのは父の愛人だから…」とか「誘拐犯に育てられた人間は…」なんぞという興味で覗き見たってあかんです。そんな不自然さを横に置いてああやこうやと理屈をこねるもん者もいるみたいやけど、そんな話には乗れまへんなあ。

だってそうやろ。観客はラストシーンで恵理菜が下した決断に救いを感じると思うけど、そんな思いは何も、特殊な人生を歩んだ彼女だけに起こることじゃないんやから。

とはいえ、やはり奇をてらった、売らんがためのあざとい小説なんや、原作は。

「こんな本、絶対買わん」

と呟いてふと鞆を開けてみたら、アレ、いつの間にか文庫本が…。

鑑賞データ：2011/05/11 横浜ブルク 13

＊公式 HP <http://www.youkame.com/index.html>

＊ Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/8793>

第6回「いのちの子ども」

ーなんともチグハグな人間世界ー

川崎 二三彦

本誌執筆者のプロフィール欄が充実しているので、これまで本欄に書いていた前置きは、そちらに転居、統合しました。

「紛争が絶えないパレスチナとイスラエル。余命を宣告されたパレスチナ人の子どもを救うために、一人のイスラエル人医師が立ち上がった」

という前振り（実はこれ、予告編冒頭のナレーション）を聞かされると、なるほど映画のストーリーとしては何かが起きるぞ、という期待感がもてる。ところがこの映画、フィクションではなくて完全なドキュメントなのである。パレスチナとイスラエル両方の人々が交錯するので、ときに混乱してしまったけれど、監督のイスラエル人テレビジャーナリスト・エルダーが追いかけるのは、余命わずかと宣告されたパレスチナの子どもと、彼を救おうとするイスラエル人医師及びその周辺のたくさんの人たちである。

＊

とはいえ、知識少ない私は端から事情が呑み込めない。何しろナレーショ

ンが「イスラエルのユダヤ人とパレスチナのアラブ人をつなぐ唯一の架け橋であるテルアビブ近郊の病院」と言った途端、「へえ、そういうことなの？」と驚くしかないのだから。

そもそもテルアビブとガザ地区の地理上の関係もよくわからず、映画のパンフにもテルアビブは載っていなかったの、後から地図で確認してみた。映画を観ている間は、何となくガザ地区のすぐ隣ぐらいに考えていたのだけれど、思っていたより遠い。ということは、ガザのアラブ人は、治療などのためイスラエル国内にたびたび出かけているということなのか、と考えてみたりする。

余談だが、私がまだ学生だった1972年、テルアビブ空港で日本赤軍が無差別に銃を乱射し、居合わせた約百名が死傷するという大事件があった。実はこのとき開かれた学生自治会の大会で、「無差別大量殺人は許せない」と発言した瞬間、私はあっという間に赤ヘル学生に取り囲まれ、ビラを丸めた紙つぶてが飛んでくるわ竹竿で突かれるわで立ち往生するはめに陥った。それもそのはず当時の自治会執行部は、実は日本赤軍と深い関係を持っていたのである。以来、私がパレスチナ問題について語ることはないのだが、今回は本作品に触発され、何十年ぶりかでおずおずと書いている次第。

さて映画は、つまりこのドキュメントは、アラブ人で骨髄移植が必要な生



後4ヵ月の赤ん坊を診たイスラエル人医師が、テレビで影響力を持つ本映画の監督に助力を請うところからスタートする。彼はたぶん、要請に応じつつこれをドキュメントに仕立てようと考えたのであろう。

中には匿名を条件とした者もいたというけれど、この呼びかけに多くのイスラエル人が協力し、手術に必要な5万5千ドルはまたたくまに集まっていく。

「ホテル・ルワンダ」という映画にもなったルワンダ内戦では、ツチ族とみるやそれだけでフツ族過激派が虐殺を繰り返したはずだが、ここパレスチナでは、国家的な対立と抗争が長く続いてはいても、こういう形で惜しみない援助がなされるのか、と私はまたまた知らない事実を教えられて感心する。

ところがどっこい、輸血のために親戚がガザから病院へ向かうちょうどそのとき、紛争が勃発してイスラエルによるガザ地区攻撃が始まってしまう。そのため検問所は閉ざされるのだが、そこはテレビの力なのかどうか、何とか切り抜ける。

映画は、一人の子どもの命を救うために必死になっている人々と、まさに同じ時、同じ地域、同じ人々によって街が破壊されていく様子を並べて映し、皮肉でも何でもなく私たちの前に提示する。付け加えれば、イスラエル側にガザ地区の悲惨な姿を生々しく伝えたのは、やはり本作の監督エルダールだ。彼は、イスラエルで活躍するアラブ人医師が軍医としてガザ地区に入り、自分の娘の死を知って悲嘆に^{なまなま}眩れる肉声を、生放送で流したのである。一方で石を積み、他方でそれを蹴飛ば



し、また積み上げる。人間はまことにチグハグというほかない。

一方、イスラエル人医師によって我が子の手術を受けるアラブ人の両親は、イスラエルの援助を受けることを、同じアラブ人から厳しく非難される。不安を覚えた母親は、監督のインタビューにチグハグな返答をし、いぶかしがられる。

どうも映画を見、こうして書いていても複雑すぎて理解不足は否めない。とにかく言えることは、たった一人の子どもに対する治療をめぐっても、いわば二千年余り続く民族対立の歴史が象徴的に現れるということだ。

とはいえ、石を積むエネルギーの源は、幼い子どもの命であることに間違いはない。この命を前にすると、二千年の対立も何もかもが消し飛ぶのである。治療の成功を素直に喜びつつ、子どもの力の大きさを思い知った映画であった。

鑑賞データ

2011/07/30 ヒューマントラストシネマ有楽町

* 公式 HP <http://www.inochinokodomo.com/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/14548>



の中の

子ども
たち

第7回「ラビット・ホール」

—子どもが死ぬということ—

川崎 二三彦

無理心中

他人には「さもありなん」と思われるようなことでも、当事者にとっては想定外としか受けとめられないことは珍しくない。多額の借金をかかえ、夫婦げんかではモノを投げつける行為もあったという夫は、自分では考えてもいなかった離婚を妻から突きつけられて驚愕する。

とはいえ妻の意思は固く、小学生の一人娘とはいつでも会えるという条件で離婚に応じ、一人暮らしを始めたのであった。ところが、離婚後たった1週間で事件が起きる。元妻の住む家から子どもを連れ出し、おもちゃを買ってやったり銭湯に入るなどした後、自宅に連れ帰って一晩過ごした翌朝のことだ。

「○恵は私の子です」「別れて暮らすなんて無理」「あの世で一緒に暮らします」

こんな遺書を書いた後、隣ですやすや寝入っている子どもの首を絞めて殺害し、自らはリストカットしたものの死にきれず、娘殺害の罪で逮捕されたのであった。

私が見たのは、大柄な体を縮こませ、肩を落として座る男の姿。今は被告人となって公判廷に登場したのである。

「活発で元気な子だった。なぜ娘にそんなことができるのか。憎くてたまらない。娘の味わった苦しみを自分も味わってからこの世を去ってもらいたい」

元妻であり、母である女性の供述調書が読み上げられ、被告人は、嗚咽しながら次のように話すしかないのであった。

「私の身勝手な行動により、未来ある大切な命を奪ってしまいました。一生かかってもこの罪はつぐなえませ

ん。申し訳ございませんでした」

どこにでもあり得るからこそ

こんな裁判を傍聴した後で観たのが「ラビット・ホール」である。

やはり子どものいのちが奪われ、そのことをめぐる父母の、夫婦の葛藤がテーマの映画。ただし、こちらは交通事故による死である。だったら私がついさっきまで目の当たりにしていた無理心中未遂事件よりも、失礼ながらありふれている。映画にするなら、むしろ心中事件のほうが起伏あるストーリーになるぞ、などと漠然と考えながら観ていたのだが……。

＊

本作は、同名の戯曲が下地になっているという。死亡した子どもの母親ベッカ役で主演したニコール・キッドマンがその芝居に感動し、自らの製作会社で映画化を実現させたのだが、見終わってなるほどと思った。

ことこの映画に関する限り、何か特別な事情で子どもが亡くなってはいけないのである。むろん、家族の誰かが責任を負うような背景があるなんてことは、展開上許されない。なぜといって、誰もが経験する可能性のある不幸だからこそ、観る者にとっては他人事でなくなるからである。そして、一つの事実を受けとめる、その受けとめ方



が人によってさまざまであることが、印象的に表現される映画だからである。

喪失体験とは

それまで育ててきた子どもを、突然のアクシデントで奪われたら、人はどうするのか。いつまでも忘れまいとして、子どもが使っていた部屋の様子を何一つ変えず、そのままの状態でおきたくなるだろうか。あるいは、悲しみを振り切って前に進むため、全てを忘れ去って再出発をはかろうとするだろうか。

映画では、夫婦の一人が子どものさまざまな持ち物を処分しようとし、一人がそれを激しく咎める。同じ境遇の人たちが集まって話し合うグループに一人は参加し続け、一人は拒絶する。子どもに対する思いはいずれ劣らぬのだけれど、こうした食い違いを通じて、夫婦は喪失感を通奏低音にしていがい合い、傷つけ合う。

ところで私は、いずれか一方に感情移入したり荷担するのでなく、彼ら二人の葛藤を、それぞれさもありなんと頷きながら観ていたのであった。

ということは……

と考えると思い当たったことがある。もしかして彼らは、一人の人間の中にあるアンビバレントな二つの、若しくは矛盾する種々の感情を形象化するために生み出された人格であって、実は一人の人間の中に彼ら二人ともが存在しているのではあるまいか、と。

原作の戯曲がピュリッツァー賞やトニー賞を受賞したというのは、現実生活ならば、おそらくは日常生活の雑事などに追われてふり返ることすらままならない私たちの感情の機微を、夫婦二人の登場人物に托し、気持ちの奥底に潜む襞に分け入るようにして示し得たからであろう。それを見事に映画化したからこそ、本作は印象深いのである。

小石

映画の最後近く、享年 30 歳の息子を亡くしているベッカの母が、「いずれ悲しみは消えるのだろうか」という彼女の問いに答えて口を開く。

「この 11 年間、悲しみはずっと消えない。でも変化するわ」

「何というのか、重さが変わるの。のしかかっていた重い大きな石が、ポケットの小石に変わる」

こう聞かされて、ベッカの中の何かが動くのだけれど、実は私自身も、目の前でその小石を見たことがある。

父が亡くなった時のことだ。医師が声を落として「ご臨終です」と告げた途端、真っ先に遺体に取りすがったのは母であった。涙を押さえながら「お父さん、アキラのところへ行って私たちを守って下さいよ」と、感極まった調子で話しかけるのだ。アキラとは、父の死よりも約 40 年近くも前、私が生まれる前に事故で亡くなった私の兄に当る人物である。したがって私にとっては遠い過去の現実感なき存在に過ぎないし、両親から彼のことを聞いたこともほとんどない。だから父の死の瞬間、彼の人の名が母の口をついて出たことは、意外でもあり驚きでもあった。だが母にしてみれば、40 年間という期間、変化はしてもやはり常にポケットに入っていた小石だったのであろう。

人の死、わが子の死とは、このようなものなのであろう。

鑑賞データ

2011/11/16 TOHO シネマズ シャンテ

* 公式 HP <http://www.rabbit-hole.jp/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/15765>

<これまでの連載>

- 第 1 回「プレシャス」 <http://bit.ly/9qGWXm>
- 第 2 回「クロッシング」 <http://bit.ly/rYwUnO>
- 第 3 回「冬の小鳥」 <http://bit.ly/eGJ1d9>
- 第 4 回「その街のこども（劇場版）」 <http://bit.ly/hzhB9t>
- 第 5 回「八日目の蟬」 <http://bit.ly/keXFwL>
- 第 6 回「いのちの子ども」 <http://bit.ly/pm8V0p>



第8回

「サラの鍵」

— 苦い真実の味わい —

川崎 二三彦

ノルウェーの謝罪

ノルウェーのストルルテンベルグ首相は、国際ホロコースト記念日の本年（2012年）1月27日、「ユダヤ人の逮捕と強制移送に、警察やその他のノルウェー市民がかかわったことを認めなければならない」「虐殺したのは間違いなくナチスだ。だが、ユダヤ人を逮捕したのはノルウェー人だ。それはノルウェーで行われた」と述べ、ナチス・ドイツのホロコーストに関与したことを公式に謝罪した。

＊

というようなニュースが、つい最近も報じられたけれど、今回取り上げる映画「サラの鍵」は、フランスにおけるユダヤ人の一斉逮捕、強制移送という歴史的事実を取り上げている。

「1942年7月16日から17日にかけて、13,152人のユダヤ人がパリとその近郊で検挙され、アウシュヴィッツに送られて殺害された。かつてこの地点に建っていたヴェロドローム・ディヴェールには、ドイツ占領軍の命令により、ヴィシー政府の警察の手で、1,129名の男性、2,916名の女性、及び4,115名の子供たちが非人道的な条件



の下で収容された。彼らを救助しようとした人々に感謝を。ここを通り過ぎる人々よ、決して忘れるなかれ！」

現場となったヴェルディヴ（屋内競輪場）跡には、こんな碑銘がひっそりと据えられているというのだが、映画の主人公となった10歳の少女サラは、まさにこの中の一人だったのである。

巧みな設定

それにしても……。

「過去を見つめ、新たな人生を始める主人公に、あなた自身も揺さぶられるだろう」「シンプルでありながら力強く、深く心に残る作品」「映画館から出てきたとき、心打たれ、この作品の力に気がつくだろう。幸福な気持ちにさえなるだろう」

映画のパンフレットに謳われているこんな惹句が、まだ物足りないと思えるほどの出来栄えだ、と感じたのは私だけだったろうか。それほどにこの感動を伝えるのは難しい。

映画を見終わって、「なるほど」と思ったことが一つある。それは、フランスにおけるユダヤ人一斉検挙を調べる記者ジュリアが、フランス人の夫を持つアメリカ人女性だという点だ。彼女は夫をこよなく愛し、愛されている。その彼女が、「ヴェルディヴ 60周年」を特集する雑誌の仕事とはいえ、フランス人の多くが忘れ去った、あるいは忘れ去りたい事件、フランスの歴史の暗い過去を無我夢中で明るみに出そうとするのである。ならばいったいどんなことが起こるのか。アメリカ人が余計なことをすると皮肉りながら、夫が

言い放つ言葉がそれを象徴していよう。

「真実を知って誰がしあわせになるのか、世界が今よりよくなるのか」

この時、2005年のシラク大統領による謝罪演説はまだ行われていない。夫をはじめ、身近な人の心に何某かざらついた感情が生まれるのは致し方ないだろう。しかも物語の進展にしたがい、それはフランス一般の歴史にとどまらず、夫の両親や祖父母の決して触れてはならない過去にまで、ひたひたと迫っていくのである。歴史を辿るプロセスそのものが、ただならぬ緊張感をもって描き出される秀逸。

少女サラの日々

一方、一斉検挙の日、弟を納戸に隠して鍵をかけたまま捕らえられたサラは……。

ナチによる大量虐殺を描いた映画は無数にあり、私自身が観たものだけでも、すでに数えることができないほどだが、フランス警察によるフランス人に対するこうした無慈悲な扱いには、やはり心が痛む。暴行、絶叫の渦巻く中、子を思って絶望の淵に沈む父と母、冷水を浴びせられて親から引き裂かれるサラ。

映画は、1942年のサラと2002年のジュリアを交互に映し出し、二つの時代が次第に交錯していく趣向となっている。そして、ことの真実が明らかになるにつれ、少女サラが経験した60年前の日々が、ジュリアやその夫、夫の家族の“今”を激しく揺さぶるのである。

「僕は知りたくない」

「真実を知って満足か」

夫婦の間には亀裂が生まれ、深まり、二人は苦悩する。

過去と現在の融合

だが、これはまだ物語の前半。実は後半で思いがけないクライマックスが待ち受けているのだが、筋書きを紹介

するのは本意でないので、ここでは映画の最後の場面をとりあげる。

3年後、故国アメリカで生活を始めたジュリアが、3歳となった我が子を伴い、ある男性と喫茶店で語り合うシーンだ。幕切れ間際、彼女がさり気なく本作品の主人公サラの名前を口にした瞬間、60年前の過去は現在とみごとに融合し、物語は深い味わいとともに完結する。

＊

パンフレットに、角田光代が感想を寄せている。彼女は原作小説を読んだ



後で映画を見、「本当に願ったとおり、映像が、小説を読んだときとまったく同じように心にしみいり、揺さぶる」と書いていたが、私は逆コースで小説を読んだ。まさにそのとおり。ストーリーはもう分かっているはずなのに、読み終えてなぜか目頭が熱くなった。映画を見る機会を逸した方、是非とも小説を手にしてください。

鑑賞データ

2012/01/24 横浜ブルク 13

＊公式 HP <http://www.sara.gaga.ne.jp/>

＊ Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/16064>

<これまでの連載>

- | | |
|---------------|---|
| 第1回「プレシャス」 | http://bit.ly/9qGWXm |
| 第2回「クロッシング」 | http://bit.ly/rYwUnO |
| 第3回「冬の小鳥」 | http://bit.ly/eGJ1d9 |
| 第4回「その街のこども」 | http://bit.ly/hzhB9t |
| 第5回「八日目の蟬」 | http://bit.ly/keXFwL |
| 第6回「いのちの子ども」 | http://bit.ly/pm8V0p |
| 第7回「ラビット・ホール」 | http://bit.ly/wF8G4a |



の中の

子ども
たち

第9回 「少年と自転車」

ーセカンドベストー

川崎 二三彦

ある里子

2歳で乳児院から里親に引き取られ、そのまま高校を卒業した女性がいた。無事就職も決まり、何とか一人暮らしにも慣れてきた頃、担当児童福祉司だった私に彼女から電話が架かってきた。

「自分の苗字を里親の姓に変えたいんだけど、できる？」

彼女は幼い頃から里親の姓を名乗っていたのだが、いざ独り立ちしてみると、たとえば自動車の免許取得ひとつにしても、本名を記載するしかないのである。友人に免許証を見せたい彼女は、名前の秘密を知られることを恐れ、ずっと我慢していた。

「20歳になれば、独力で家庭裁判所へ姓の変更を申し立てることができるよ」

そう言って私は、里親の姓を名乗っていた期間が長期にわたることを証する書類を用意して彼女に渡した。

そんな彼女が、もう一つ頼んできたことがある。実の親を探してほしいというのだ。

「会ってどうしたい？」

何気なく尋ねた時の彼女の答えが忘れられない。

「決まってるやろ！ 張り倒してやるんや」

不都合な真実

この映画に出てくる11歳の少年も、父親を探そうとする点では彼女と同じだ。事情はわからないが、父は息子を施設に預けて身を隠しており、少年は、わずかな手がかりを頼りに無我夢中で父の姿を追い求めるのである。ただし、私が出会った彼女と違うのは、決して



「張り倒す」ためではないところだ。

「お父さんは引っ越したんだから、いくら電話してもつながらないよ。さあ、その受話器をよこしなさい」

電話の向こうから「おかけになった電話番号は、現在使われておりません。番号をお確かめになって…」というメッセージが流れるのを確認して、大人たちは少年の行為が無駄であることをわからせようとする。けれど彼は、決して受話器を手放さない。父が自分に内緒で姿を消すなんて、絶対あるはずがないと信じて……。いや、実のところ彼は信じてなんかいない。ただ、疑うという選択肢を持たないだけなのだ。なぜといって、疑えば生きてなんかいけないから。

私もその部類だが、大人は不都合な真実を子どもに伝えることを躊躇する。できれば機が熟すまで、つまりは彼や彼女が冷静にその事実を受けとめることができると（自分たちが）思えるまで、待ったほうがいいと考える。だが、子どもは違う。＜今すぐ＞なのだ。

周囲の大人は、だから真実が明るみに出ることを恐れ、子どもの必死さにせつなくなる。映画を観ている私も、いつの間に身を固くし、顔がこわばっ

ていく……。

自転車

さて物語は進行し、少年は、ひょんなことから週末里親を引き受けた女性とともに、父を探し続ける。そしてわかったことは、自分があれほど大切にしていた自転車（マウンテンバイク）を、当の父親が売り払ったということ。里親によって自転車が買い戻された途端、少年は大人達の制止を振り切って街へ飛び出していくのだが、その運転さばきの巧みなこと。パンフレットを読むと、映画製作はどうやら自転車の特訓から始まったらしい。確かに彼が自転車で駆け抜けるからこそ、映画はすごい緊迫感を醸し出すのである。大人の手をすりりとかわして走り抜け、あるいはせっかくの自転車を奪われて、今度は彼がどこまでも追いかける……。自転車は、つまりは暗喩だ。それは彼自身であり、また彼が最も大切にしているものの象徴なのだろう。



セカンドベスト

自転車が疾駆する度に胸苦しさを覚えながら、ふと思い出した映画があった。「セカンドベスト／父を探す旅」だ (<http://bit.ly/HWTMds>)。20 年も前の作品だが、父は服役していて養育が出来ない。そこに現れた独身男性が養親になることを申し出て、10 歳の少年の心が揺れ動くのである。

＊

一方、本作での少年は、週末里親の女性にも支えられてついに父を見つけ、短い会話を交わし、そして拒絶される。その後は、さもありなんという

展開があり、再び父に対するいじらしい気持ちが表現され、再び拒否される。

とすると、こんな彼と付き合う里親女性も穏やかではいられない。彼の行動に困惑し、自身の恋人との関係も脅かされて決断を迫られる。

こうした紆余曲折の後のラストに登場するのが、やはり自転車である。ただし、最後のシーンでは自転車は疾駆しない。その走りはあくまでも穏やかであり、周囲の風景に溶け込んでいるのであった。

＊

二つの映画に出てくる少年は、いずれも名状しがたい余韻を残して^{たびだち}出発を迎え、幕となる。

「そうか、私たちの相談援助活動も、急所はセカンドベストにあるのかも…」

唐突にこんなことを書くと、読者の怪訝そうな顔が浮かぶけれど、考えてみれば、彼らは決して望んでいたものを手にしたわけではない。彼らの決心には悲しみが隠されており、現実を、つまりはセカンドベストを受け入れることで初めて^{たびだ}出発つことができたのである。

だったら、援助者も同じではないのか。相談者とともに変えられぬものを受け入れ、受けとめ、セカンドベストの中にこそベストがあることを自覚する、この映画を観て気づかされたのは、そのことだ。

＊ 2011 / ベルギー・フランス・イタリア
＊鑑賞データ 2012/04/01 109 シネマズ川崎
＊公式 HP <http://www.bitters.co.jp/jitensha/>
＊ Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/16375>

<これまでの連載>

- | | |
|---------------|---|
| 第1回「プレシャス」 | http://bit.ly/9qGWXm |
| 第2回「クロッシング」 | http://bit.ly/rYwUnO |
| 第3回「冬の小鳥」 | http://bit.ly/eGJ1d9 |
| 第4回「その街のこども」 | http://bit.ly/hzhB9t |
| 第5回「八日目の蟬」 | http://bit.ly/keXFwL |
| 第6回「いのちの子ども」 | http://bit.ly/pm8V0p |
| 第7回「ラビット・ホール」 | http://bit.ly/wF8G4a |
| 第8回「サラの鍵」 | http://bit.ly/Hf2MsL |



の中の

子ども
たち

第10回 「オレンジと太陽」

ーソーシャルワークの理想を見たー

川崎 二三彦

発 端

「それは不可能よ」

「違法です！ 保護者なしで船に乗せるなんて」

偶然聞かされたエピソードを、最初は言下に否定したマーガレットだったが、次第に疑い、調査を始め、ついには信じ難い事実と直面する。では、その事実とは……

＊

「悲しいことだが、ゆりかご^{から}が空であることが過疎の一因となっている時代には、外部に供給源を求める必要があります。そしてもしこの不足を我々と同じ人種で補うことができなければ、我々は近隣地域に住む多産な無数のアジア人諸種族の脅威に自らの身をさらすままになったはずであります」

こう演説したのは、西オーストラリア・パースの大司教。1938 年 8 月、8 歳から 12 歳までの子どもたち 37 人がイギリスから到着した歓迎会の席でのことだ。大司教は続ける。

「若年の少年少女を連れて来て農業や家事を初歩から教え込むという現在採用している政策は、遥かに良識にかなった方法であります。これには、子供たちを初手からオーストラリアの環境になじませ、オーストラリア人の感情や理想を彼らの中にしみ込ませるといふ付加価値があります。これこそ真



の市民の本質的特徴となるものであります」

イギリスのソーシャルワーカーであり、自らの活動を「からのゆりかごー大英帝国の迷い子たちー」として著したマーガレット・ハンフリーズは、その著書の中で、この点につき次のように述べる。

「計画の裏にある論理がはっきりしてきた。英国は社会福祉問題を解消するために金を払い、一方、オーストラリアは人口を増やす」

衝 撃

本作を観て、私はじっとしていられなくなった。それはまず何よりも、戦後も長く続いたイギリスの児童移民政策に対する衝撃による。

映画終了後、その場で買い込んだ分厚い本を読み進むうちに、事実、私は激しいダメージを受けてしまった。イギリスからオーストラリアに渡った子どもたちは、孤児院に収容されて過酷な環境に置かれ、養育者による虐待の数々は、文字どおり筆舌には尽くせない。しかも数十年後の今に至るまで自らの名前や年齢さえも間違われ、自分が誰であるかがわからないのである。過去を奪われた人間が味わう比類なき苦しみというものを、これでもかと言うほど次々と目の当たりにさせられ、私は耐えきれなくなってしまった。

「その人まだ生きていますか？」

「ええ、生きています」

「信じられない。こんなに運がいいなんて！ その人、どんな人？」

「美しい方よ」

本書も半ばにさしかかろうとしたところで登場する一コマである。

「私にはお母さんがいるのね！」

もはや限界だった。喫茶店にいた私はたまらず本を閉じ、両手で顔を覆って吹きこぼれそうになる感情を押し殺すしかないのであった。

面 接

それにしても、映画ではいくつかの面接場面に感心させられた。たとえば、夫婦でパブを営む女性を訪ねるシーン。

「まあ、もしかして……」

結婚する前に生んだ娘のことを、女性は夫に隠していた。

「静かなところで話しましょう」

「娘はどこに？」

「今はオーストラリアです。そこの孤児院で育ちました」

突然こんなことを聞かされたら、誰だって茫然とし、次の瞬間、泣きじゃくるしかあるまい。私までがその女性を抱きしめたいという衝動に襲われたのだけれど、2 人の間にはテーブルがあって思うにまかせない。とその瞬間、マーガレットはそっと手を伸ばし、さりげなく女性の手を握る。「ああ、こういう面接をしたいものだ」と思わずにはいられない心憎い仕草であった。

もう一つ、やはり調査結果を伝えるシーンを紹介しよう。面接のために、彼女は慎重に場所を選ぶ。かつて私も、条件の悪い出張先の面接では椅子や机の位置などを微調整し、多少とも安心して面接できるよう工夫したもののだが、彼女は毅然としている。

「ここではダメ。大切な情報を伝える、一生忘れられない日になるの。もっといい部屋を」

選ばれたのは、海を望む瀟洒な一室であった。

「母が見つかった？」

「ええ」

「死んでいたんだね」

「ええ」

驚 嘆

それにしても、映画の主人公となったマーガレットのソーシャルワークには驚嘆させられる。彼女がこの活動を



始めたのは 1986 年。振り返ると、私が児童福祉司となったのは 1989 年だから、彼女はいわば私と同時代のソーシャルワーカーだ。

その彼女が予断を捨て、求められるまま真摯に事実に向き合い、僅かな手がかりを頼りに気の遠くなるような調査を続け、わかったことは注意深く当事者に伝え、サポートする。当時の児童移民政策が明るみに出ることを恐れる者から白眼視され、脅迫されて身の危険を感じてもくじけず、ついには英豪両政府が公式の謝罪を表明する。

ことの重大さを前に、彼女は本来の児童福祉業務を^{なげう}擲ち、今なおこの活動に全精力を注ぎ込んでいるというのだが、緻密な調査活動や一つ一つの面接といった個別の援助を超え、期せずして強いソーシャルアクションもなしている。まさに彼女こそ真のソーシャルワーカーと言うべきであろう。

* 2010 / イギリス・オーストラリア

* 鑑賞データ 2012/05/27 岩波ホール

* 公式 HP <http://www.oranges-movie.com/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/16328>

<これまでの連載>

- 第 1 回 [プレシャス] <http://bit.ly/9qGWXm>
- 第 2 回 [クロッシング] <http://bit.ly/rYwUnO>
- 第 3 回 [冬の小鳥] <http://bit.ly/eGJ1d9>
- 第 4 回 [その街のこども] <http://bit.ly/hzhB9t>
- 第 5 回 [八日目の蟬] <http://bit.ly/keXFwL>
- 第 6 回 [いのちの子ども] <http://bit.ly/pm8V0p>
- 第 7 回 [ラビット・ホール] <http://bit.ly/wF8G4a>
- 第 8 回 [サラの鍵] <http://bit.ly/Hf2MsL>
- 第 9 回 [少年と自転車] <http://bit.ly/LXzFK4>

映画
の中の
子ども
たち

第11回
孤独なツバメたち

～デカセギの子どもに生まれて～
—知らなかった彼らの青春、彼らの人生—

川崎 二三彦

舞台挨拶

映画館に通うようになって数十年になるけれど、監督の舞台挨拶というものに出くわしたことはなかった。だから、ブラジル映画祭の初日に上映された本作品でのそれは、初体験となる。

「ブラジル移民の子孫、つまりは日系ブラジル人が、長い時を隔てて、今度は日本にデカセギに来ており、中でも浜松は、日本で最も多くのブラジル人が自動車製造関係の派遣労働者として暮らしています。映画は、彼らと共にやってきた子どもや来日後に生まれた子ども、つまりは第2世代となる若者5人を追いかけたものです。賛否はあるでしょうが、ご覧になって是非とも率直なご意見、ご感想を聞かせてください」

というようなことが上映前に語られたのだが、挨拶したのは浜松学院大学の津村公博教授。実はこの人が本作品の共同監督の一人なのである。

「なぜそんな人が映画監督を？」と疑問に思ったのだが、そもそもの出発点は、多文化教育を専門とする彼が日系ブラジル人青年の生活実態を調査すべく、土曜の夜毎、浜松市内で若者たちにインタビューを繰り返していたことに始まる。もちろん映画化なんて毛頭考えもしなかったのだが、2008年、日本人のブラジル移民百周年を機に、



この調査に同行した NHK ワールドテレビのディレクター中村真夕が、魅力的な子どもたちに惹かれて「ドキュメンタリー」を作りたいと言い出したことが、本作誕生のきっかけだ。

リーマンショック

とはいえ、彼らの生活は過酷だ。たとえばユリ。彼は 10 歳で来日したものの、中学時代から非行に走り、手には「Hustler」と書かれた刺青が彫られている。映画では、少年院を退院した後の彼が登場するのだが、ブラジル人ギャング団を作っていたと告白する。ただし、「別に悪いことをするためにギャングを作ったんじゃない」「表の社会で成功するのは難しいけど、裏の社会の人たちは、自分のことをリスペクトしてくれるから」という。

あるいは 19 歳のエドアルド。母子で来日し、日本とブラジルを行き来していたのだが、外国籍の子どもに義務教育は適用されないせいか、彼は中学を中退して働き出す。今では帰国した母と別れ、一人日本で生活しているのだが、驚いたことに、一日の仕事を終えたと、夜間にブラジル人中学生に英語を教え、自らも勉強して大学に行く夢を持っているというのだ。

ところが、撮影を始めてすぐの 2008 年 9 月、リーマンショックが起こる。ために自動車産業は大打撃を受け、浜松でも外国人派遣労働者である彼らは真っ先に失業し、窮地に陥ってしまう。

渡り鳥

15 歳の少女パウラをおそう運命も例外ではない。日本で生まれ育ち、今では恋人もいて、中卒後すぐ自動車関

連工場で働いていたのだが、彼女の両親が帰国を決意するのである。

「私は恋人とずっと一緒にここに居たいけど、親の決めたことだから……」

彼女はそう話し、未踏の「祖国」ブラジルに旅立って行くのであった。

先に紹介したユリも、やはり帰国する。一方、大学入学を目指していたエドアルドは、大麻所持で起訴され、強制送還を命じられたのだが、日本に残ることを決意して雑踏の中に消えて行った。

映画のタイトルに使われた「ツバメ」は、渡り鳥のように自由と見えて、実は居場所が定まらない彼らを象徴してのことだ。

ドキュメンタリーに前もってストーリーがあるわけではないから、彼らがバタバタとブラジルに帰ってしまうことは想定外であった。そこでカメラは、彼らの帰国後の姿を追ってブラジルに渡る。映し出されたのは、たくさんの家族を支えるために働き、夜学に通うパウラであり、結婚して子どもが出来たユリ、あるいは浜松でブレイクダンスのチームを結成していたコカが、帰国後、ダンスを通じて地元の若者と交流している姿であった。

日系ブラジル人の今

上映終了後、再び登壇した津村教授に会場からいくつかの質問が出された。

「彼らのその後が気になります。彼らは今どうしているんでしょう？」

こう尋ねたのは、なるほど「私も当事者の一人です」と自己紹介した女性であった。



教授は、「取材した 5 人のうち、4 人もが帰国するとは思ってもみなかった」と話しつつ、その後の彼らの様子を丁寧に説明した。彼は研究者として調査するだけでなく、現在も彼ら若者と交流し、日系ブラジル人中学生に対する支援活動も続けているのである。

次に発言したのは、やはり少し年配の日系ブラジル人。この男性は岐阜県在住だが、映画が京都で上映されると知って、わざわざやって来たのであった。

「大変すばらしい作品だった。日本で大きく成功した人もいるけれど、一方でこういう現実があることを、日本人もブラジル人も、もっと知るべきだと思う」

こんな発言に応じて、津村教授は次のように話す。

「この映画は、なるべくメッセージ性を薄めて青春群像として観てもらおう意図しましたが、リーマンショック後に策定された『日系人離職者に対する帰国支援事業』は、手切れ金のようにして本人に 30 万円、扶養家族 1 人当たり 20 万円を支給するだけで、支給を受けた人は『当分の間』再入国が認められません。だから…」

暗に日本政府の政策を批判していたが、過酷な状況にもかかわらず、決して日本のことを悪く言わない彼ら若者たちへの冷静かつ熱い思いが伝わる発言であり、また、映画であった。

* 2011 / 日本・ブラジル

* 鑑賞データ 2012/10/20 京都シネマ

* 公式 HP <http://lonelyswallows.com/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/18909>

<これまでの連載>

- 第 1 回「プレシャス」 <http://bit.ly/9qGWXm>
- 第 2 回「クロッシング」 <http://bit.ly/rYwUnO>
- 第 3 回「冬の小鳥」 <http://bit.ly/eGJ1d9>
- 第 4 回「その街のこども」 <http://bit.ly/hzhB9t>
- 第 5 回「八日目の蟬」 <http://bit.ly/keXFwL>
- 第 6 回「いのちの子ども」 <http://bit.ly/pm8V0p>
- 第 7 回「ラビット・ホール」 <http://bit.ly/wf8G4a>
- 第 8 回「サラの鍵」 <http://bit.ly/Hf2MsL>
- 第 9 回「少年と自転車」 <http://bit.ly/LXzFK4>
- 第 10 回「オレンジと太陽」 <http://bit.ly/QtU4sl>



第12回 アシタ 明日の空の向こうに —子どもは未来である—

川崎 二三彦

虐待死の検証

ことさらに発言したいわけではないが、子どもの虹情報研修センターで勤務するようになってから虐待死事例を検証する機会が増え、最近も幼い子どもが餓死する事件について考えることがあった。

こうした事件を前にすると、なぜこのような事件が生じたのか、私たちはその背景や要因を知りたくなる。

そこで本事例を振り返ってみると、餓死事件に先立つかなり以前、すなわち母親がまだ 19 歳の頃に流産するという出来事があった。相手の男性は現在の夫で、年齢は一回り上。この男性と母の実家は流産をめぐる揉め、関係が悪化するのだが、母はそれを機に男性と同居し、何人かの子を産み、結婚する。こうしたことが背景にあつてのことだろう、家族が困難に陥ってネグレクトも深刻化し、いよいよ援助が必要となった時、頼るべき実家との関係が断たれていた母は、事件を防ぐきっかけさえ掴めないまま、加害者となって虐待死の片棒を担ぐしかないのであった。

他方、継母が 39 歳で妊娠し、実家に強く反対された中で同じように子どもが餓死した事件があった。相手男性は、先の例とは対照的に 10 歳以上年下。しかし女性の 39 歳と言えば、“これを逃せば次はない”という切羽詰まった思いに捕らわれても仕方ない時期だろう。この妊娠が、同居男性の子の養育に影を落とし、焦りを生んで破局へと繋がっていく。

2 つの事件はともに餓死という結末を迎え、いずれも妊娠という出来事が微妙に影響していると思われたが、だからといって、それでネグレクト死の

全てが解明できるわけではない。彼らの生育史、家族の背景、援助機関の取り組みその他、さまざまなことを調査し、吟味しなければ、納得を得ることなど到底できないのである。

ケースワークが邪魔をする

ケースワーカーとして長年働く間に身体に染みこんでしまったのは、そんなことを考え続ける性癖だ。相談を受ければ、まずは主訴を確認して問題の所在がどこにあるかを探り、家族図を描き、生育歴も把握して、つまりは子どもや家族をまるごと理解して解決に当たろうとする。

だからであろう、この映画、正直に言うと、観ている間ずっとストレス続きだった。なぜと言って、ここに出てくる 3 人の子どもたちが、どうして駅舎で暮らしているのか、彼らの家族のことや生活史は微塵も説明されないからだ。

「いや、どこの国にだってホームレスの子どもはいるはずだぜ」

なるほど。しかし百歩譲ったとして、では、どうして子どもたちは国境を越えようとするのか。彼らの住むロシアの国情も向かう先のポーランドのそれも理解していない私には、彼らがそこ



までする動機が皆目検討つかないし、いかにフィクションとはいえ、どうにも不自然さが否めないものであった。

ただし、映画を見終わって読んだパンフレットに、「実際の事件は 2005 年に起きた」「(1990 年代に) ロシアの少年 3 人が国境を越えてポーランドに入国するがすぐにロシアに送り返された」などとあって、事件の発生時期に食い違いはあるものの、こうした出来事が実際にあったことを知らされ、ストレスは驚きが変わった。

誰も表現できない魅力

それはさておき、子どもたちが歩き続けて国境をめざすロードムービーでもある本作は、終始 3 人の子どもたちがスクリーンの真ん中に登場する。だから映画の出来不出来は彼らにかかっているといってもいいのだが、その意味ではまさに大成功だったと言うほかない。誰一人として演技経験を持たないという少年 3 人のうち、2 人は映画でも現実でも兄弟だったが、特に弟ペチャ（演じるのはオレグ・ルイバ）には本当に“参って”しまった。



演技を超えた彼の一挙手一投足が醸し出す愛くるしさは、誰もが無条件で受け入れるしかないものであって、兄たちは、足手まといを怖れて置き去りにしようとする気持ちを翻し、市場の女性は物乞いする彼に食料を分け与える。また、少年たちと出くわした婚礼の一行にあっては、花嫁が惜しげもなく彼に硬貨を渡す。それもこれもひとえに、ペチャのしぐさ一つ一つに打ち

勝ち難い魅力を感じるからであろう。

つまるところこの映画は、ストーリーよりもむしろ、子どもたちのそんな自然でピュアな姿を映し出すことに主眼がある。観ているうちに、そう悟らざるを得ないのであった。

ゆえに困った。本作について述べるならば、彼らの持つ魅力を過不足なく表現することが必要だが、頭のどこをどうひねっても、それにふさわしい言葉が見つからないのだ。そこで、パンフレットの解説に助けてもらおうとしたが……、

『『キッド』『禁じられた遊び』『汚れなき悪戯』『天使の詩』『ポネット』…、映画史に残る子どもたちを描いた名作の数々。今、そのリストに新たな子どもたちの傑作が加わります』

『『明日の空の向こうに』が、ここに挙げた数々の子供を主人公にした映画の中でもかなり上位に位置するのは、作品をご覧になれば一目瞭然だろう』

「子どもは未来である」

虹センターの会議室には、「子どもは未来である」と書かれた額が飾られているが、この映画は、それをまざまざと思い起こさせるような作品だった。結局は誰もがその魅力を語り尽くせないとしたら、やはり観るしかない。それが今回の結論ですな。

* 2010 / ポーランド・日本

* 鑑賞データ 2013/01/30 109 シネマズ MM 横浜

* 公式 HP <http://www.pioniwa.com/ashitanosora/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/20478>

<これまでの連載>

- 第 1 回 [プレシャス](#)
- 第 2 回 [クロッシング](#)
- 第 3 回 [冬の小鳥](#)
- 第 4 回 [その街のこども](#)
- 第 5 回 [八日目の蟬](#)
- 第 6 回 [いのちの子ども](#)
- 第 7 回 [ラビット・ホール](#)
- 第 8 回 [サラの鍵](#)
- 第 9 回 [少年と自転車](#)
- 第 10 回 [オレンジと太陽](#)
- 第 11 回 [孤独なツバメたち](#)

* 題名をクリックすると本文へジャンプします。



第13回 旅立ちの島唄～十五の春～ ―堪えて歌うんだよ―

川崎 二三彦

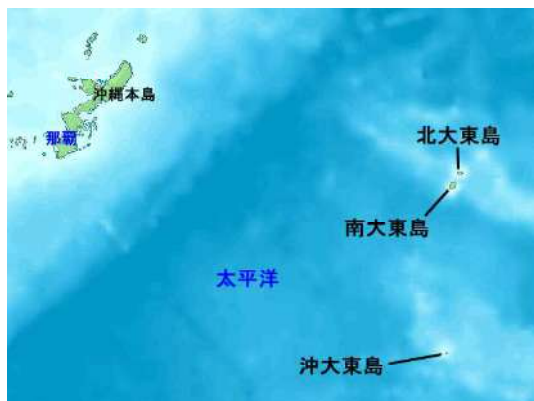
南大東島

「沖縄本島から東へ 360 km。南大東島には高校がない。子どもたちはみな十五の春に島を旅立つ」

予告編のこんなフレーズに誘われて観た南大東島が舞台のこの映画、タイトルも作品のテーマをそのまま表したものだし、特別何か趣向を凝らしているわけでもない。けれど、素直に観ていけばジーンとくる、そんな映画だった。

＊

ところで、南大東島は「台風が一番最初に通ることが多い有人島」らしい。そういえば、子どもの頃から天気予報でよく耳にしていた記憶があるが、考えてみるとそれがどこにあるのか、どんな島なのかはほとんど知らなかった。



そこで少し調べてみると、島の面積は約 30km²、最高標高 75m の平らな島で、島全体が「南大東島村」なのだという。1900 年に八丈島から 23 人の開拓団が上陸してサトウキビ栽培を始めており、以来、今日まで百年以上、島の基幹産業となっている。映画の中でも、主人公の中学 3 年生優奈（三吉彩花）の家族はサトウキビの栽培農家という設定で、TPP 参加に激しく反対す

る農家の話し合いの場面もあった。

2013 年 3 月 1 日現在の人口は、Wikipedia によると推定 1435 人。高校受験の際の面接で、「島のみんなが知り合いで、一つの家族みたい」と優奈が話すのだけれど、おそらくそのとおりだろう。8 km 離れた北大東島との「南北両大東村親善競技大会」は、「両村のスポーツ振興と親善交流を深める目的で両村交互に球技及び相撲大会を開催」と村の公式ホームページで説明されていて、映画でそのシーンを見る限り、子どもから大人までが競技に参加する一大イベント。おそらくは、たくさんの島民がエキストラで出演し、年中行事と同じように演じたのだろうが、なるほど、それぞれの島民が一つの家族のようになって応援している姿が印象的だった。

家族

さて、物語はこうした島の現状を背景に展開する。映画が始まるとほどなく、優奈の母（大竹しのぶ）が島に住んでいないことがわかる。どうやらそれは、兄や姉が沖縄本島で高校生活を送る際、付き添って一緒に生活するために島を離れ、そのまま戻ってこなかったことによるらしい。形は少し違うけれど、私も単身赴任して早くも 7 年目。家族や夫婦が同じ空間で過ごすことはやはり必要だと感じたので、けんかするためであっても、任地と自宅を往復するよう心がけている。ただし、島と沖縄本島は船で 13 時間。加えてその船も毎日運行されてはいないのだから、行き来もままなるまい。本作の母は、もともと島の出身ではなく、那覇での生活が続けるうちにいつのまにか夫婦の間に溝ができ、帰島するチャ



ンスを失ったのであろう。十分あり得る話だなと、私は思った。

こうして戻るべき人が戻らぬ代わりに、戻らなくてよい人、つまり結婚した優奈の姉が、子どもを連れてふいに戻ってくる。何があったのかはわからないけれど、これまた日本のどこにもある光景で、こうなると南大東島も例外ではないのである。

ただし、少し違うところもあった。

「長男の嫁が何年も家^{うち}を空けっ放しにすると、世間に恰好つかないよ」

近所のよしみで、日頃から互いに食べ物をお裾分けするような濃い人間関係の中で生きているからこそ、親戚のおばちゃんの発言だ。

アバヨーイ

ところで、南大東島には「ボロジノ娘」という少女民謡グループがあるという。そもそもこの映画も、ボロジノ娘の登場するドキュメンタリーに心を動かされたことが出発点だったらしい。彼女たちが中学を卒業し、島を離れる時に唄うのが、「アバヨーイ」。作詞・作曲は村役場職員。15 歳にして島を離れる子どもたちが、原点を忘れず、夢と希望をもって旅立つ想いを綴ったもので、今では島の欠かせぬ別れの唄だという。だから、優奈が唄う「アバヨーイ」は、映画のクライマックスとなる。

ということはこの映画、シナリオこそオリジナルではあるけれど、そのほとんどは南大東島の生活を忠実に再現し、ロケに際しては全島を挙げて協力した作品なのである。事実、民謡教室

の新垣則夫先生も、素のままで登場する。

「この唄は泣いて歌ったら価値ないからさ、堪えて歌うんだよ」

優奈が唄と三線を習う場面で、新垣先生は穏やかな口調でこんなふうに注意していたけれど、私には、なぜかこのシーンが最も強く心に残った。この一言にこそ、島で生きるさまざまな思いが凝集されているように感じられたからだ。三吉彩花は短期間の猛特訓でこの唄を覚え、クライマックスでは、緊張の中にも涙を見せず、見事に唄い終えたのであった。

イニシエーション

映画を見終わって、ふっと考えたことがある。現代の子どもたちの一体どれぐらいの者が、こんなふうに 15 歳を迎えるだろうかということだ。

高校受験の面接で、優奈は「この島が好き」と言いながら、入学後に一人残されることとなる父親（小林薫）のことをしきりに心配していた。旅立つ自分のことよりも、残される父のことを考える。島に高校がないという現実が、15 歳の春を迎える彼らの通過儀礼となって、彼らを一回り大きくするのであろう。

かつて、長く京都府知事を務めた蜷川虎三は、「一五の春を泣かせない」という名言を吐いて高校全入を目指したが、一五の春は、泣かせてはならないし、泣いてもいけないのであった。

* 2013 / 日本

* 鑑賞データ 2013/05/18 チネチッタ

* 公式 HP <http://www.bitters.co.jp/shimauta/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/20875>

<これまでの連載>

- 第 1 回 [プレシャス](#)
- 第 2 回 [クロッシング](#)
- 第 3 回 [冬の小鳥](#)
- 第 4 回 [その街のこども](#)
- 第 5 回 [八目目の蟬](#)
- 第 6 回 [いのちの子ども](#)
- 第 7 回 [ラビット・ホール](#)
- 第 8 回 [サラの鱧](#)
- 第 9 回 [少年と自転車](#)
- 第 10 回 [オレンジと太陽](#)
- 第 11 回 [孤独なツバメたち](#)
- 第 12 回 [明日の空の向こうに](#)

* 題名をクリックすると本文へジャンプします。



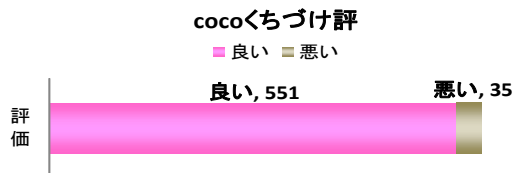
第14回 くちづけ

—間違ってもやしないか、この物語—

川崎 二三彦

絶賛

本連載で、私がいつも末尾で紹介しているのが映画案内 coco のホームページ。「Twitter から映画の評価が分かる & 映画の鑑賞記録が残せる」という謳い文句で、ほとんど全ての映画が網羅されており、今回取り上げる「くちづけ」も例に漏れず、下図のとおり(2013 年 9 月 8 日現在)、圧倒的に高い評価を勝ち得ていた。



ちなみに、もう一つの映画ガイドである「Movie Walker」でも、最高評価の星 5 つが 4 割を超えて最も多く、平均でも 4.2 と高い。寄せられた声も、「多分今年一番の映画。傑作です! さすが、伝説の舞台といわれるだけあって脚本がいい! 久しぶりに上映後化粧直しが必要なほど泣きました」だとか、「こういうの(注: Movie Walker の評価やコメント)は参考にさせて頂く事はあってもレビュー投稿なぞしない私が、どうしても投稿したくなって ID を取ってしまいました……。それぐらい良い!!!」「ボロボロに泣くしかないのですが、見終わったあとスッキリして清々しい気持ちになれるのは、



愛に溢れた物語だからでしょうか」といった絶賛で溢れかえっ

ていた。

「ウウム、伝説の舞台の映画化なのか」「評判もすごく良いし、タイトルも何となく好ましい」

迷わず私も出かけることにした。

ちょ、ちょっと待ってくれ

映画は、知的障害者のグループホーム「ひまわり荘」を舞台に、そこで暮らす人々やホームを支える人たちの日常を、時にコミカルに、時にはシリアスな問題も投げかけつつ描き出していく。中心となるのは、早くに妻を亡くし、最近このホームにやって来たその名も「愛情いっぱい」という漫画家と、彼が男手一つで育ててきた障害をもつ娘マコ。映画のスタッフやキャストが実際のグループホームを取材もして作り上げたという本作は、障害者差別にかかわるエピソードや、簡単にはいかない彼らの現実生活も織り込み、ものすごく感動的というわけではないとしても、それなりに了解できる内容で進行する。

だが、映画がクライマックスに近づくにつれ、私はいやな予感に襲われた。事前にストーリーは見ないようにしていたのだけれど、この展開ならば、どうしたって先が読めてしまう。

「やめてくれ」「ちょっと待てよ、おい!」

という心の声もむなしく、物語は最悪のコースを辿るのであった。

「親子心中」の研究

ここ数年、私は「親子心中」に関する研究をおこなっており、古くは戦前の時代を含むさまざまな文献を集め、さらに新聞報道を整理して最近 10 年間の全ての事例を把握。加えて、子どもが死亡し親が生き残った事件の公判

を傍聴するなどして、事例の詳細な検討も試みている。

ところで、子どもを殺した被告側弁護士が、公判の中で必ずと言っていいほど用いるのが、「被告には、子どもに対する愛情があったからこそ、こうした行為に及んだのです」という理屈だ。実はこれ、戦前からわが国に根強く存在しており、たとえば、「親が自分の最愛の愛子を殺して心中を図るという行為は日本人としてその肉親を愛さんとする一つの最も美点の現れであるとも見られます (昭和 9 年)」といった発言は、その一例であろう。

ただし、公判を傍聴すればするほどに感じることは、「親子心中」、つまり「子殺し心中」は、どのようなものであっても、子どもにとっては理不尽きわまりないということだ。だから、「わが国の歴史においては、児童の人権を抹殺した親子心中という言葉が安易に用い、美化し許容してきた」として、多くの研究者が「心中」という用語の使用そのものを避けている。

子どもの無念

もちろん、事件は起こる。古今東西、つまりは洋の東西を問わず、過去から現在に至るまで「子殺し心中」事件は発生し続けている。だから、「ひまわり荘」での生活を映し出す前半部分からするとかなりの違和感はあるものの、諸般の事情が重なり、追い詰められた父親が娘を殺すしかないと考えた物語があっても、もちろんよい。

だが本作では、「愛情いっぱい」という命名が象徴しているように、まさに「肉親を愛さんとする一つの美点」というとらえ方に傾き過ぎて、＜子殺しの理不尽さ＞という視点がほとんど感じられないことだ。換言すれば、「ウーヤン」との結婚を夢見、「殺さないで、お父さん!」という内心の叫びを聞き届けられないまま殺害されたマコの無念さが、いっぱんの「愛情」に隠され、置き去りにされているようではないのである。

想定外



しかも腑に落ちないのは、子を殺害した父親が、いかに余命幾ばくもない状況であったとはいえ、私の想定と違って「心中」を図ろうとさえしなかったことだ。むろん、「死ね」というわけではないが、あえて作者に聞きたい。

「娘を殺めた上で、父親は余命を全うし、マンガを描くんですか」「娘がウーヤンと結婚するのは、はなから論外だったんですね」と。

蛇足だが、この展開だと、障害者同士の結婚なんてあり得ないということが暗黙の前提にあると読めてしまう。

そんなモヤモヤが頭をかき乱したのであろう、号泣した人には誠に申し訳ないが、映画館を出た途端、私は思わず毒突いてしまった。

「××××」(4文字伏せ字)

*

なお、妻を亡くして父子家庭で障害児を育てる父が、癌で余命がないことを宣告されて呻吟する映画なら、中国・香港映画「[海洋天堂](#)」と瓜二つ。こちらは心中未遂から物語が始まるのだが、本作と比べてみるのも一興だろう。

* 2013 / 日本

* 鑑賞データ 2013/06/14 横浜ブルク

* 公式 HP <http://www.kuchizuke-movie.com/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/20982>

第 1 回	プレシャス	* 題名を click すると 本文へ移動します。
第 2 回	クロッシング	
第 3 回	冬の小鳥	
第 4 回	その街のこども	
第 5 回	八日目の蟬	
第 6 回	いのちの子ども	
第 7 回	ラビット・ホール	
第 8 回	サラの鍵	
第 9 回	少年と自転車	
第 10 回	オレンジと太陽	
第 11 回	孤独なツバメたち	
第 12 回	明日の空の向こうに	
第 13 回	旅立ちの島唄	



第15回 もうひとりの息子

—錯綜する家族、ならば親子とは—

川崎 二三彦

手術

鼠径ヘルニアと診断されて入院し、簡単な手術をしたことがあった。驚かされたのは、「あなたは川崎二三彦さんですね」と、わかりきっているのに繰り返し尋ね、タグを付け、さらには手の甲にも直接マジックで名前を書き込んで何重にも間違いを避けようとしていたことだ。念には念を入れるというのはこういうことを指すのだろうか、本人確認の仰々しさには嗤ってしまった。それでも今夏、某大学医学部附属病院では、患者を取り違えて別人の手術を行い、肺の一部を切除したというのだから、笑い話ではない。

そして、父になる

さて、この秋は、産院で子どもを取り違えるというエピソードをもとにした映画が立て続けに 2 本上映された。“そんな馬鹿な”と思えるような話だが、特に自宅出産から病院での分娩が主流になった昭和 40 年代頃から、何十件もの取り違い事件があったというから、決して絵空事ではないのである。



それはさておき、そのうちの 1 本は、6 歳で取り違えが発覚した「[そして父になる](#)」。カンヌ国際映画祭で審査員賞を受賞した話題作だということで、私

も早々と映画館に足を運んだ。ただし、今号で取り上げるのは別作品「もうひとりの息子」だ。こちらは子どもが 18 歳になってから初めて取り違えに気づくという設定だけれど、2 作品を並べてみて改めて考えたのは、「そして父となる」というタイトルについてだ。なぜと言って、赤ちゃん取り違いというのであれば、これは家族の、また夫婦の問題であって、わざわざ「父」をタイトルにする必要はないではないか。

だが、こうした問題が起こると真っ先に立ち現れるのが、「疑う者」としての父と、「疑われる存在」としての母だろう。ところが、2 つの映画に出てくる 4 人の母は、誰もがとまどい、苦悩し、あるいは自責の念に捕らわれながらも、母であるという一点に限れば揺らぐなどということはあり得ない。一方、父の動揺は根源的な不安と繋がっている。言うなれば、赤ちゃん取り違いの事実が明らかになった途端、4 人の母は瞬時にして、育てた子と産んだ子の 2 人の母になり、父は 2 人の子いずれに対しても父たり得なくなってしまったのである。だからこそ、映画は物語の展開過程を「そして」で示唆し、希望を暗示し、物語の帰結を指し示す「父になる」をタイトルに選んだのではないだろうか。

パレスチナ問題と家族

閑話休題。本作では、取り違えられた 2 組の家族が、対立関係にあるユダヤ人とパレスチナ人であったこと、子ども時代の全てと言っていい 18 年間を、実の親子としてそれぞれの文化の中で暮らしてきたことが重大問題となる。

かつて私は、連載第 6 回で、「[いの](#)

「ちの子ども」を取り上げたが、それは、余命を宣告されたパレスチナ人の子どもを救うために、1 人のイスラエル人医師が立ち上がるというドキュメンタリーだった。「幼い子どもの命を前にすると、二千年の対立も何もかもが消し飛ぶ」というのが私の感想だったが、今度ばかりはそう簡単にはいかない。

拒絶した者

興味深かったのは、彼らの 18 年間の“育ち”を否定したのが、パレスチナの家族にあっては彼の兄であり、イスラエルではユダヤ教であった点だ。

「実母がユダヤ人ではないヨセフは、もはやユダヤ人ではない」

ユダヤ教の宗教指導者は、相談に来た彼に対し、静かに、しかし妥協の余地なくそう告げる。他方、18 年間ずっと兄弟として暮らしてきたはずの兄は、イスラエルとの闘いこそが全てに優先するのであろう、ヤシンがまるでスパイでもあったかの如く、「おまえはユダヤ人だ」「向こうで暮らせ」と、激しくかつ反射的に彼を拒絶するのであった。

「なるほどな」

と、私は思う。兄と宗教指導者、まさに彼らこそ、社会の主要なイデオロギーを代表し、「血は守らなければならない」と主張するのである。

ここへきて物語の構図は明瞭になった。取り違えが発覚して、2 人が生きる社会は、彼らをその血ゆえに拒絶し、父は激しく動揺する。他方、母は手塩にかけて育てた子に加え、「もうひとりの息子」をも発見したのであり、2 人の息子は、このような中で自らの道を模索するのである。

運命

「知った時、どんな気分だった？」

「たぶん、君と同じさ」

それまで思い描いていた未来について否応なく変更を強いられた彼らは、しかし健気に、また懸命にその運命を受け入れようとする。2 人で度々出会って話し、ともに行動する姿は、まるでそれぞれの人生を交換し、合体させ



るかのように、私には感じられた。

むろん、「そして父となる」の小さな主人公たちも、同じ事態に直面せられ、親と子という根本問題についての不条理に、必死になって抵抗する。

「これからはおじさんをパパと呼ぶ」

「なんで？ おじさん、パパちゃんやん」

「これからはおじさんがパパなんだ」

「なんで？」

「なんでも」

「なんで？」

琉晴は執拗に問いかけることで、降りかかる運命と闘おうとするのだし、慶多だって、家族を交換することが「ミッション」だと言われて従順に従うように見えて、その実、久方ぶりにやって来た“父”を精一杯拒絶する。

とすると、彼は一体“誰の”父になったのだろうか……。

2 つの作品の 2 つの物語は、それぞれ余韻を残してエンディングを迎えるのであった。

* 2012 / フランス

* 鑑賞データ 2013/10/28 シネスイッチ銀座

* 公式 HP <http://www.moviola.jp/son/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/35237>

第 1 回	プレシャス
第 2 回	クロッシング
第 3 回	冬の小鳥
第 4 回	その街のこども
第 5 回	八日目の蟬
第 6 回	いのちの子ども
第 7 回	ラビット・ホール
第 8 回	サラの鍵
第 9 回	少年と自転車
第 10 回	オレンジと太陽
第 11 回	孤独なツバメたち
第 12 回	明日の空の向こうに
第 13 回	旅立ちの島唄
第 14 回	くちづけ

* 題名を click
すると本文へ移
動します。



第16回 メイジーの瞳

―過不足な愛の行く末―

川崎 二三彦

面接

唐突かも知れないが、本作を観ながら、なぜか思い出したのは、ある面接の逐語記録である。

＊

福祉司：そんならお父さんは、「子どもは自分の血を分けた分身だから離すことは出来ない。お前に身を引いて貰うより外ない」とおっしゃったらいふでしょう。そうおっしゃいましたか？

父：いゝえ、そう云ってしまえば、家内は帰ってしまうでしょう。帰られると、女中を傭うことも出来ないから、私は困るのです。女中を使うのはもうこりごりです。

福祉司：それでは奥さんは女中がわりです。奥さんの人格を無視し、奥さんを道具扱いにしていると同じですね。

父：まあ、そんな……

福祉司：もし私が奥さんだったら、そんな結婚はいやになりますね。

＊

なんだこれは？ という疑問や批判の声が聞こえてきそうだが、この面接は、児童福祉法によって戦後直後に設立された児童相談所における黎明期の面接の一コマで、本記録が掲載されて



いる研究紀要には、当該児童福祉司の反省的コメントも載っている。

父母の平等

それはともかく、海外も飛び回る画商の父と夜の仕事や地方公演も多いロック歌手の母。すれ違い夫婦の離婚によって 6 歳のメイジーの親権が争われ、父母が 10 日間ずつ交代で養育するという裁判所決定が、この物語の出発点となる。本当は私は、いかに共同親権とはいえ、いかに父母を平等に扱うとしても、裁判所はよくもこんな生活スタイルを決めたものだったと思った。なぜといって、これじゃあ主人公のメイジーは、自分が＜誰の子＞であるかはわかって、自分が＜どこの子＞かがわからなくなっていて、とても落ち着いた生活はできまいと感じたからである。それともアメリカではこれが普通なんだろうか……。などとこだわっていたら映画の展開についていけないので、先へ進もう。

離婚後、住居を移したメイジーと父との暮らしの第一歩は、それまでベビーシッターだった女性の登場から始まる。父は彼女と結婚し、メイジーもそれを受け入れるのだが、一方、母親にもバーテンダーとして働く新しいパートナーができる。

「メイジー、あなたのために結婚したのよ」

そうなのか、と眉につばして頷きながら、児童虐待の世界では、こういう関係とにかくリスクが生じやすいんだぞ、などと要らぬお節介をしたくなる。のだけれど、本作のこの男性、なかなかできた人物で、メイジーとも好ましい関係を築いていく。そして、

「ハハーン、この映画の趣向はそれだな」

それでは奥さんは
女中がわりです

と、いつ頃気づいたのかは覚えていないが、何しろ忙しい実父・実母である。彼らは2人とも、養育の責任を忘れて仕事にうつつを抜き、子どもとの約束もすっぽかして養育交代時のお迎えさえ怠ってしまう。その結果、やむなく尻ぬぐいをさせられるのがそれぞれの新しいパートナーなのである。

「それでは奥さんは女中がわりです。奥さんの人格を無視し、奥さんを道具扱いにしていると同じですね」

面接でこんな言葉を口にするには、
相当の勇気があるだろうが、映画で次々に現れる実父母の身勝手さを見せつけられると、思わずこんな台詞を投げつけてみたくなるというものだ。

さて、子どもを押しつけられたパートナーたちは、行き場を失ったメイジーを目の前にして捨て置くこともできず、否応なく協力せざるを得ない。

これで行く末は見えてきた。毎日せっせとラブレターを届けていた郵便配達夫が、いつのまにか当の女性の恋人になってしまったというような映画があったかどうかは知らないけれど、この2人、いわばベビーシッター仲間として自分たちのパートナーに怒りと不信を抱き、共同してメイジーの養育に当たるようになって、気づくといつのまにか……、というわけである。

過不足な愛

それにしても、この両親の愛はどうだろう。「これじゃネグレクトと言わざるを得ない！」とため息が出るほど



の自己都合優先。にもかかわらず、たまに帰ってメイジーと顔を合わせれば強く抱きしめ、「愛している」を連発し、びっくりするようなプレゼントも用意している。

この映画で、私が最も気になったのは、作品の主題とは離れているけれど、こうした仕打ちを受けるメイジーの心だ。ただし、本作の彼女が何らかの心的ダメージを受けているといった描写はない。彼女はあくまでも、澄んだ瞳で両親や彼らのパートナーをじっと見つめるだけである。だが、

「メイジーは、いつか壊れてしまう」

彼女が無垢なる存在だけに、私は、はらはらせずにはおれなかった。

というのも、かつて一時保護した男児に、これとそっくりの状況があったから。引き取り予定の日になっても母が現れず、担当児童福祉司は母の嘘八百に振り回されてうつ状態に陥り、やっとのことで出現した母は、今度は一転、頼ずりせんばかりの愛撫。その極端さに啞然とさせられたものだが、ようやく引き取ってもらった途端、突然警察が現れ、子どもの面前で母を連れて行く。けなげな子どもも、次第には情緒不安定になっていくのであった。

この映画が現代の父母の姿を象徴しているとしたら、それは確かに暗澹とせざるを得ないが、ここは映画の展開上、こんな両親像を創るしかなかったのだと、信じたい。

* 2012 / アメリカ

*鑑賞データ 2014/02/02 TOHO シネマズ 川崎

* 公式 HP <http://maisie.gaga.ne.jp/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/35832>

- 第1回 プレシャス
第2回 クロッシング
第3回 冬の小鳥
第4回 その街のこども
第5回 八日目の蟬
第6回 いのちの子ども
第7回 ラビット・ホール
第8回 サラの鍵
第9回 少年と自転車
第10回 オレンジと太陽
第11回 孤独なツバメたち
第12回 明日の空の向こうに
第13回 旅立ちの島唄
第14回 うちづけ
第15回 もうひとりの息子

* 題名を click
すると本文へ移
動します。



第17回 ファイ 悪魔に育てられた少年 — 極限の“父と子” —

川崎 二三彦

サスペンス

朝一番の新幹線で京都から横浜に到着し、午前中、ある事件の公判を傍聴した後、午後から東京で開かれた会議に出席したら、夕方になった。少し疲れが残っているこんな時には娯楽作品がいいのじゃないか、と思って見たのが本作品だ。

宣伝文句に「超震撼サスペンス・アクション」などと銘打つだけあって、軽く食事をしたついでにビールも飲んでいたけど、眠気など忘れて見入ってしまった。

この手の映画を見慣れているわけではないので、他作品と比べて論じるわけにもいかないし、そもそも私が銃撃戦がどうのこうのと並べ立てても何か不似合いだろう。ただし、本作品のために映画館に足を運んで損することは決してない、とだけは言いたい気分だ。

こんなことを書いていると、「おや、今回は『映画の中の子どもたち』とはあまり関係なさそうですね」などと突っ込まれそうだが、実はご明察。読者は筆休め原稿のつもりで読みたい。

悪魔に育てられた少年

とはいえこの作品、副題に「悪魔に育てられた少年」とあるように、単純なアクション映画というわけでもない。

「『悪魔』なんぞという表題からして、何となくおぞましい雰囲気があるな。それにファイって何のことや」

タイトルを見て、気持ち的にはいささか引き気味だったが、少年は意外にも心優しく、映画に「悪魔」は登場しなかった。少年を育てたのは確かに犯罪者であり、「白昼鬼」と呼ばれるような「鬼」ではあっても、「悪魔」ではあるまい。だからこの副題は、客引

き目当ての日本の興行主が勝手に入れたんじゃないかと邪推した。

5人の父親

さて、予備知識を全く持たないで見たせいか、少年ファイが、5人の男たちを誰彼なく「パパ」とか「父さん」と呼ぶのには面食らった。私は最近、とみに物覚えが悪くなっているので、恥ずかしながら、「はて、さっきパパと言われていたのは聞き間違いだったかな」などと混乱したが、本作品では、5人の男の誰もがファイの父親という設定なのである。



それにしてもこの映画、私のように迂闊な人間にとっては、ちょっと油断しただけで、一瞬理解が遅れてしまう。

「おい、まだ子どもだろ」

スリリングなカーチェイスだって、最初どうしてファイが運転しているのかわからなかったが、この5人は、それぞれが犯罪行為のための凄技を持ち合わせており、こうした技術をファイ少年に逐一教え込んでいたのである。それでようやく映画の趣向はわかったのだけれど、では、どうして彼らは、単なる犯罪集団ではなく、5人ともがファイの「父親」でなければならないのか。

思うに、「白昼鬼」リーダーのソクテが児童施設の出身だったというから、この 5 人はきっと、施設の中で辛酸をなめ、互いに励まし、あるいは傷を舐め合い、何とか生き延びてきた仲間ではないだろうか。無慈悲な犯罪と、ファイに対する奇妙な愛情が混ざり合う秘密はそこにある。

「あっ、だから悪魔なのか？」

などと勝手な考えを巡らせていたら、いつの間にか本作品は、「超震撼サスペンス映画」から「家族とは何かを問いかける秀作」に変身しているのではないか。

2人の父親

こうして私は、凶悪な犯罪者集団が誘拐した当の子どもを育てるという摩訶不思議な状況を受け入れていくのだが、物語はこの後、これぞまさに“映画”という展開をみせる。

「白昼鬼」が請け負ったのは、土地再開発で儲けようと企む悪徳業者からの依頼。立ち退きを拒む夫婦を消してしまえというのである。

「殺してみろ」

「撃て！」

「撃つんだ!!」

犯行現場に連れて行かれたファイは、抗い難いソクテの声に震え、おびえ、ついには男にむけて何発もの銃弾を放つ。しかしそれは、育ての親ソクテの命令によって実の父を殺害する行為に他ならないのであった。

映画は一転、全てを知ったファイと 5 人の父との壮絶な戦いへと突き進み、クライマックスを迎えるのだが…



「父さん、なぜ僕を育てたのですか……」

「おまえは、俺たちと同じ怪物になる運命なんだ」

飛び飛びに聞こえてきた 2 つの台詞は絡み合い、交錯し、本作品を通底するテーマを象徴的に示していたのである。だから破滅寸前のファイが 5 人の父に挑むアクションシーンは、単なる観客サービスというだけでなく、非現実であるのに妙なリアリティを持って胸に迫り来る。そのシナリオの見事さに、私は感嘆してしまう。

ヨ・ジング

ところで、17 歳の少年ファイを演じたヨ・ジングは、韓国の新人男優賞をいくつも受賞したというが、納得だ。何しろ彼は、誘拐された幼児が小学生になったという想定で、自らをファイに置き換えて日記を書いたというのだから、その役者魂、もしくはプロ意識に感服した。しかも、撮影当時はまだ 15 歳だったというから驚かされる。

＊

などとあれこれ書き連ねてきたけれど、本原稿はもたもたしていて、映画のスピードとテンションに完全に負けている。皆様、こんなものを読む暇があれば、早く映画館に足を運んで本作を見てみましょう。私も、もう一度見たくなった。

＊ 2013 / 韓国

＊鑑賞データ 2014/05/19 シネマート六本木

＊公式 HP <http://www.hwai-movie.net/>

＊ Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/36247>

- | | |
|--------|---------------------------|
| 第 1 回 | プレシャス |
| 第 2 回 | クロッシング |
| 第 3 回 | 冬の小鳥 |
| 第 4 回 | その街のこども |
| 第 5 回 | 八日目の蟬 |
| 第 6 回 | いのちの子ども |
| 第 7 回 | ラビット・ホール |
| 第 8 回 | サラの鍵 |
| 第 9 回 | 少年と自転車 |
| 第 10 回 | オレンジと太陽 |
| 第 11 回 | 孤独なツバメたち |
| 第 12 回 | 明日の空の向こうに |
| 第 13 回 | 旅立ちの島唄 |
| 第 14 回 | くちづけ |
| 第 15 回 | もうひとりの息子 |
| 第 16 回 | メイジーの瞳 |

＊ 題名を click
すると本文へ移
動します。



第18回 思い出のマーニー —私は誰?—

川崎 二三彦

忘れるしあわせ

「思い出のマーニー」ならば、イギリス児童文学の有名な作品だ。だからご多分に漏れず、私も何かのきっかけで読んだことがある。ただし、「何かしら不思議なストーリーだったな」というような印象が記憶の彼方にぼんやりと浮かぶだけで、内容はさっぱり思い出せない。

気になって映画館に出かけてみたら…。物語はどんどん進んでいくのに、最後まで何も思い出せなかった。でも、たぶんそれが良かった。なにしろ新鮮な気持ちで映画に浸り、新鮮な感動があったから。これを「忘れることのしあわせ」と、言うはずはないか…。昨今は、忘れ続ける日々にはしばしば困っているのだから。

ただし映画のタイトルは「思い出のマーニー」。映画を観ている間はその意味がわからなかったけれど、見終わったときには、なるほどと納得。

「そうだったんだ、この物語は」

エンドタイトルで「おわり」が打れたとき、私はしあわせな気分になった。我が身が浄化されたんでしょうね、きっと。

「私は、私が嫌い」

さて、開始早々に、主人公の一人杏奈がこんなことを言う。



「私は、私が嫌い」

この台詞が、この映画のキーワードの一つだろう。

「本作を見て、私はたしかに、過去の自分のありようを鮮明に思い出したのだが、しかし、鑑賞中、それは過去ではなく、『いま』だった。『私にもこんな感情があったなあ』となつかしむのではなく、『いまこの瞬間、十代である自分』をマーニーや杏奈と生き直しているような、そんな生々しさをひたすらスクリーンを見つめつづけた」

「(本作は)『大人を慰撫し、郷愁へ誘う作品』では断じてなく…」

と熱くパンフに書いたのは、作家の三浦しをん。残念ながら、私はそこまでの生々しさを感じることはできなかった。もしかしたら人生が枯れかけているから? かどうかはともかく、転地療養を理由に、優しさいっぱいなのになぜか息苦しい養育家庭を逃れ、海辺の親戚宅で一夏を過ごした杏奈が、「私が嫌いな私」をいつのまにか昇華させ、最後のシーンで「しあわせよ」と口にしたのは十分理解できたし、それを実感できる映画だったからこそ、観ていた私も「しあわせ」に浸ることができたのではないだろうか。

マーニーの登場

長く空き家になっていて、「^{しめ}湿っち屋敷」などと呼ばれている洋館が本作の舞台である。

「あそこには行っちゃだめだよ」

という忠告を聞きながら、なぜか屋敷に惹かれる杏奈の前にマーニーが立ち現れる場面は、なかなか工夫が凝らされている。実は、こういうあり得ない設定を、私は苦手に行っているのだけれど、アニメ作品の強みなのか、マーニーと杏奈が、「私たちのことは秘



密よ」と言いながら親しくなっていく展開は、観ていて自然に応援したくなった。

「一晩に3つずつ、質問することにししょう」

こんなことを思いついただけで、心が躍るような気分に入れ、楽しくてしかたがない少女たち。

私にとってそれは、三浦しをんが言う「いま」ではなく、かといって「郷愁」でもないけれど、「憧憬」のようなものだったのかも知れない。

「湿っち屋敷」から忽然と現れたマーニーが、一体何者であるかはわからなかったとしても、彼女の登場は、杏奈を過去の自分から解き放す触媒として十分な存在だったに違いない。そのことを証拠立てるエピソードの一つが、杏奈が打ち明ける気持ちになった「すごい秘密」だろう。

すごい秘密

かつて、児童相談所で児童福祉司をしていた頃のことで。非行相談でやって来た中学生との面接を終えた心理判定員が、こんな報告をする。

「彼、変なことを聞いてくるんだ」

「えっ、どういうこと？」

「『相談費用はいくらだ?』ってね」

思わず笑ってしまった。児童相談所は公的機関だから、むろん相談は無料であり、私は面接の最初に、誰によらず必ずそのことは説明していた。が、それは保護者に対してであり、そんなことを子どもに話したことはない。それを、日頃学校で教師に反抗し、親に反発している当の本人が心配していたというのだから、笑うしかあるまい。

彼の相談が、その後順調に進んで終了したことは言うまでもない。

杏奈の「すごい秘密」を聞いたとき、私は瞬時に彼のことを思い出した。もっとも、杏奈の場合は彼とは逆で、養育家庭に、つまりは＜自分＞にお金が支給されることが、人には言えない悩みの原因だった。とはいえ、この時期の子どもたちが、大人があまり考えないような悩みをかかえて生きているという点では変わらない。そういえば私自身も、叔母の家に下宿していた高校時代、財布をなくして困ったとき、「いくら入っていたの」と問われてどうしてもその額を口にできず、悶々とした記憶が蘇ってきた。

本作は、思春期のそんなさまざまなエピソードを知らず知らずのうちに呼び覚ます。秀作の所以であろう。

エンディング

こんなことが重なって、映画はエンディングを迎え、マーニーが誰であって、杏奈がなぜマーニーと出会わなければならなかったのかが、明らかになる。そして、杏奈自身が自分が誰であるかを理解する……。

こうして夏が終わり、気づくと、彼女を迎えに来た母、ではなく＜おばちゃん＞との間にあった気づまりは雲散霧消している……。多忙な私たちにも、時にはこんな映画が必要だったんだと、つくづく思った次第。

* 2014 / 日本

* 鑑賞データ 2014/08/25 横浜ブルク 13

* 公式 HP <http://marnie.jp/index.html>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/36657>

- | | |
|--------|---------------------------|
| 第 1 回 | プレシャス |
| 第 2 回 | クロッシング |
| 第 3 回 | 冬の鳥 |
| 第 4 回 | その街のこども |
| 第 5 回 | 八日目の蟬 |
| 第 6 回 | いのちの子ども |
| 第 7 回 | ラビット・ホール |
| 第 8 回 | サラの鍵 |
| 第 9 回 | 少年と自転車 |
| 第 10 回 | オレンジと太陽 |
| 第 11 回 | 孤独なツバメたち |
| 第 12 回 | 明日の空の向こうに |
| 第 13 回 | 旅立ちの島唄 |
| 第 14 回 | くちづけ |
| 第 15 回 | もうひとりの息子 |
| 第 16 回 | メイジーの瞳 |
| 第 17 回 | ファイ |

* 題名を click
すると本文ヘジ
ャンプします。



の中の

子ども
たち

第19回 ショートターム

—曙光—

川崎 二三彦

過酷な生を生きる

「これはフィクションじゃなくて、実は本当にあったことなんだ」と錯覚するほどの現実感に圧倒されて、映画が終わってからもうすぐには立ち上がれなかった。

登場人物のさまざまなエピソードが折り重なり、渦となって頭の中を駆け巡る。映画を観たのは、私が長くかわっている児相研（全国児童相談研究会）の第 40 回記念東京セミナーが終わって、児童相談所の元同僚としばし歓談した後のことだったけれど、児童相談や児童虐待問題の世界に身を置く人には、是非とも観てほしいと思わせる映画だった。



舞台は、さまざまな家庭問題をかかえ、おそらくは何らかの症状を持っている思春期の子どもたちが暮らす短期入所のグループホームである。映画の導入部で、「入所の期間は 12 か月以内、ただし、期限内に退所できない子どもも多い」といった字幕が入る。

日本で言えば、情緒障害児短期治療施設と児童自立支援施設、さらには自立援助ホームを足し合わせたようなところだろうか。「SHORT TERM 12」という原題は施設名らしいが、してみると「12」とは 12 か月という意味だろうかと考えたりしたが、詳しくはわか

らない。

さて、ここでは施設に落ち着けず、飛び出してしまう者もしょっちゅうだ。冒頭のシーンもそこから始まる。施設のルールとして、敷地内ではホールディングできても、一旦施設から外に出てしまえば、勝手に子どもの身体に触ることはできないという。そう言えば、かつて児童相談所で一時保護していた無職少年が、「こんな所は出て行く」と宣言して堂々と無断外出したことがあった。慌てて後を追いかけて、駅構内で長々と話し合ったのだが、親に拒否され、橋の下で暮らしていた彼は、行く当てもないのに、私の説得に次第に苛立ち、最後は駅のコナクリを蹴り上げて壊し、姿を消してしまった。過酷な人生を生き抜く本作の若者たちを見ていると、そんな経験が思い出されて胸が苦しくなるのを禁じ得ない。

人が支えられるとは？

とはいえ、映画は、子どもたちを過度に悲劇的に描くのでもなく、彼らをケアする側の人たちについても、その仕事と人生を的確に表現する。

心に残ったいくつかのシーンを記してみよう。まもなく 18 歳になり、施設を出て行くことが決まっているマーカスだ。彼が創ったラップを聴いていて、震えてきた。施設では禁じられている悪態をふんだんに歌詞に取り入れ、渾身の限り母親への恨み辛みを毒つくのである。その内容が真に迫っているせいか、ふと見ると、スタッフのメイソンも、渡されたボンゴでリズムをとりながら聴き入っているではないか。

もう 1 シーン紹介してみたい。新しく入所してきて、「こんなところで友だちなんか作る気はない」などと言い放つ少女ジェイデンだ。もちろん彼女

も人には言えない過去を持つ。その彼女の誕生日。やって来るはずだった父親が現れず怒りが爆発、彼女は取り押さえられ、文字どおりの「冷却室」で女性スタッフ、グレイスと過ごすのである。彼女に自傷の痕を見つけたグレイスは自らの不幸な過去を打ち明け、ジェイデンも次第に落ち着きを取り戻す。

私が気に入ったシーンはこの後にやってくる。気を取り直した彼女が「冷却室」を出てくると、入所していた他の子どもたちが、ろうそくを点したケーキで、一斉に彼女の誕生日を祝うのである。

決して声高に叫ぶのではない。けれど、人が人によって支えられるというのはこういうことだと、私は思い知らされる。

自立と再生の始まり

ところで、この映画の主人公は、実は入所の子どもたちではなく、彼らを支える女性スタッフ、グレイスなのである。子どもたちが起こすさまざまな出来事に対処する中で、次第にスタッフの物語が明らかになっていく趣向は、本作の味わいの一つである。

たとえば、ジェイデンの過去とグレイスの妊娠がオーバーラップし、妊娠を喜ぶパートナーのメイソンとは対照的に、なぜかグレイスはそれを拒否し、二人の関係が壊れかけるのである。私が男だからかどうか、メイソンの気持ちはすぐに共感できても、グレイスの態度と行動は、にわかには理解しがたいものであった。だが、それゆえに彼女の行動は、彼女の歩んだ歴史とともに、いつまでも私をとらえ、考えさせることになる。

この映画のよさは、子どもたちとスタッフの双方が、この「SHORT TERM 12」という場の中で、つまりは彼らの交わりの中で何かに気づき、いつの間にか成長し、再生していく点にある。それこそ、私たちがめざす理想の姿であり、長く子どもたちとかかわり、彼らに育ててもらったと実感している私の率直な感想だ。付け加えれば、それが見事に形象化されているからこそ、



この作品は秀逸なのである。

先に私が思い出した無職少年のことに、もう少し触れたい。駅から姿を消して数週間後、彼が児童相談所に電話してきた。聞けば、自暴自棄になってたばこ2、3本分の葉を食べたという。深夜だったが、担当ワーカーが急遽出勤し、手当てしてくれる病院を探して処置するのに付き添い、再び一時保護して一緒に住み込みできる就職先を探す。そして、生活必需品の何も持たない彼のために、ワーカーは職員に呼びかけて中古の家電などを揃えて送り出してやったのであった。

こうしてみると、彼が映画の登場人物の一人となり、映画に出てきた少年や少女が、現実空間に飛び出して実際に生活していたとしても全然おかしくない。私はそんな不思議な気分が襲われて映画館を出たのであった。

* 2013 / アメリカ

* 鑑賞データ 2014/11/16 シネマカリテ

* 公式 HP <http://shortterm12.jp/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/37263>

- | | |
|------|---------------------------|
| 第1回 | ブレスヤス |
| 第2回 | クロッシング |
| 第3回 | 冬の小鳥 |
| 第4回 | その街のこども |
| 第5回 | 八目目の蟬 |
| 第6回 | いのちの子ども |
| 第7回 | ラビット・ホール |
| 第8回 | サラの鍵 |
| 第9回 | 少年と自転車 |
| 第10回 | オレンジと太陽 |
| 第11回 | 孤独なツバメたち |
| 第12回 | 明日の空の向こうに |
| 第13回 | 旅立ちの島唄 |
| 第14回 | くちづけ |
| 第15回 | もうひとりの息子 |
| 第16回 | メイジーの瞳 |
| 第17回 | ファイ |
| 第18回 | 思い出のマーニー |

* 題名を click
すると本文へ
ジャンプします。



の中の

子ども
たち

第20回 真夜中のゆりかご

—実母たちの物語—

川崎 二三彦

児童虐待

児童虐待がテーマというわけではないが、虐待問題が登場するらしいと聞いて出かけて観たのが本作品。2014年のデンマーク映画である。

のっけからだった。「ヤクの捜査だ」と、アパートの一室に刑事2人が踏み込むと、DVがらみの夫婦喧嘩が佳境を迎えており、刑事に驚いた夫がわめき散らす。

「オマエが呼んだのか！」

妻は激しく否定し、咄嗟に彼らを締め出してしまった。「ああ、これじゃ殴られる」などと心配したものの、なるほどDVとはかくあらんと思わせる描写だろう。

刑事はドアを蹴破って再び突入するが、奥の部屋を覗いて思わず顔を背ける。そこには、生まれたばかりの赤ちゃんが、糞尿にまみれて泣いていたのである。

「福祉課に連絡だ！」

映画はこうして始まり、子どもは保護され夫婦は連行される。誰が考えても納得できる展開だ。ただし、私が虐待問題にかかざらわっているせいかどうか、その後の流れに引っかかって物語に乗り遅れてしまった。というのも、ヤクが検出されなくて夫婦が釈放されたのはいいとして、例のベビーもすぐに彼らの元へ返されたからである。



「かなり重篤なネグレクトじゃないか。デンマークでは、これでも親に引き渡すのかい？」

「一度、この国の虐待対応システムについて調べなくちゃ」

などと、ああでもない、こうでもないと思案しているうちに、物語は私を置き去りにしてどんどん進んで行ったのである。何しろ本作は、これだけのDV・虐待・ネグレクトがある夫婦に子どもが返されてはじめて成立する仕立てなのだから、いかんともし難い。

突然死

さて、こんな捕り物を続けている敏腕刑事も、帰宅すれば愛すると妻と生まれたばかりの赤ちゃんが待っている善良な夫であり、父である。ただし、愛くるしいベビーは夜泣きが激しく妻は疲れ気味。それを気遣って、夫は懸命にベビーをあやし、泣き止むまで車に乗せて深夜の街をドライブするなど、かいがいしく働くのである。

そんなある朝のこと。なぜか子どもが息をしておらず、それに気づいた妻が絶叫し、錯乱する。

駆け寄った夫が救急車を呼ぼうとすると、今度は一転、妻は凄まじい形相で拒絶する。

「イヤ! 電話したら、私は死ぬ!!」

「子どもはもう死んでるんだよ」

ははあ、この映画、ネグレクトの次は「突然死」なんだ。今の私の職場じゃ珍しくもない、食傷気味の話かい？ などと思っていいたら、物語は、あっというまに核心に向かって突っ走る。

「遺体とこの子をすり替えてきた」

刑事の決断だ。

2組の親子は、ここへきて大きく交錯するのである。

特殊の中にある普遍

さて、実の親から子どもが切り離さ

れることで生じる悲喜こもごもの映画は無数にあり、本連載でもいくつか取り上げた。たとえば「八日目の蟬」は、誘拐犯が子育てをするという設定だったし、「もうひとりの息子」は、2組の夫婦の子どもが取り違えられる話だ。すると本作は、両者を足して2で割ったようなものかも……。

それにしても、どうしてまた、こんな特殊な設定をしなければならないのか。物語世界に入りそびれながら考えていて、はっと気づいたことがある。それは、特殊な状況だからこそ、普遍的な姿を浮き彫りにすることができるということだ。

「愛する子どもを失ったのに、この上、妻にまで死なれてなるものか」と思いつめた刑事の、前後を失い常軌を逸した行動に妻はどう反応するのか。固唾をのんで見ていた私は、不条理に納得せず困惑する彼女の言動に、ある意味、胸をなで下ろしたのだが、もう一組の夫婦の反応も、なるほどと思える内容だった。何しろ、朝起きてみたら、息絶えた子どもがそこにいるのである。薬物依存のDV男は、預かり知らぬ乳児虐待で逮捕、拘留されるなんてまっぴらだと罪を免れるべく奔走するのだが、パートナーの母は、瞬時に一つの確信を得て、「あの子は生きている」と口走る。

「馬鹿もん、死んでるじゃないか！」

「死ねば、顔つきだって変わるんだ」

夫はぐだぐだ言う妻を尻目に死体を遺棄し、狂言芝居を打つのだが、彼女は、それを茫然と拱手傍観する。

＊

気がつくと、私もこのあたりから次第に映画の世界に入り込んでいた。

「あんな夫婦に育てられるより絶対幸せだ」と刑事の夫に説得され、戸惑いながらも母乳を与える妻。だが、ある夜彼女は、子どもを乗せたベビーカーを道路の真ん中に置いて通りかかった車を止め、ドライバーに必死の思いで掛け合うのであった。他方、DV男の妻は、逮捕されても「あの子は死んでいない」と繰り返し、挙げ句、病院に送られる。

では普遍性とは何か。簡単に言えば、男は問題解決に奔走し、女は感情に身



をさらすということだ。

まだ映画を見ていない人のために、ここで結末を書くわけにはいかないが、短絡、保身、浅知恵、もしくはそれら全てが当てはまると思える男の行動とは対照的に、生死を問わず子どもと分離された母たちは、否応なく湧き起こる自らの感情に抵抗などしない。結果、激しく翻弄されて破局を迎えもすれば、思いもかけず強くもなるのである。女性監督だからというわけでもないのだろうが、本作は、対照的な2人の女性に対照的な結末を用意しつつ、そうした母の姿を表現させている点で納得させられるものであった。それにしても、男が気づくのは、いつも遅すぎる。

なお、本作は最後に再びある種の児童虐待を登場させることで、完結するというこも付け加えておこう。

＊ 2014 / デンマーク

＊鑑賞データ 2015/05/24 TOHO シネマズ 二条

＊公式 HP <http://www.yurikago-movie.com/>

＊ Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/38779>

- | | | |
|------|-----------|-----------------------------------|
| 第1回 | プレシャス | * 題名を click
すると本文へ
ジャンプします。 |
| 第2回 | クロッシング | |
| 第3回 | 冬の鳥 | |
| 第4回 | その街のこども | |
| 第5回 | 八日目の蟬 | |
| 第6回 | いのちの子ども | |
| 第7回 | ラビット・ホール | |
| 第8回 | サラの鍵 | |
| 第9回 | 少年と自転車 | |
| 第10回 | オレンジと太陽 | |
| 第11回 | 孤独なツバメたち | |
| 第12回 | 明日の空の向こうに | |
| 第13回 | 旅立ちの鳥唄 | |
| 第14回 | くちづけ | |
| 第15回 | もうひとりの息子 | |
| 第16回 | メイジーの瞳 | |
| 第17回 | ファイ | |
| 第18回 | 思い出のマーニー | |
| 第19回 | ショートターム | |



の中の

子ども
たち

第21回 きみはいい子

— 供養の映画 —

川崎 二三彦

ある子ども

性懲りもなくというべきか、仕事柄というべきか、児童虐待が扱われているらしいと聞かされ、気がつく足が自然に映画館に向かっていった。だからこういう映画は、座席シートに座ってもあまりわくわく感がない。むしろ、いささか食傷気味というのが偽らざるところだ。

が、上映開始しばらくして、俄然目が覚めてきた。いくつかの物語が絡み合うオムニバス映画の一コマ。雨の中、小学校の校庭で雨宿りしている子どもを見つけて、担任が声をかけるシーンだ。

「まだ帰ってないのかい？」

「お父さんが、5 時までは帰ってくるなというから……」

様子が変わってくるのはこのあたりからだ。「あれ、この子、私の知^{いぶか}っている子とよく似ているな」と訝りながら、次の展開に目を凝らしていると、担任が「家まで送っていくよ」と声をかける。なぜかためらう子どもを説得して自宅にたどり着くと、玄関先にいた男が気づいて子どもを問い詰める。

「誰？ こいつ」

「先生」

「私、担任の岡野です」

「おまえ、なんかしたの？」

「……」

「あっ、いえ、雨だったもので、私が送ってあげようと言ったんです」

こんなやりとりの後、担任が、「5 時にならないと帰ってはいけないとのことですが……」と言いかけた途端、男は「うるせー」と怒鳴って子どもを連れ、家の中に入ってしまう。

ここまで何気なく見ていたのだが、はっと気づくと、視点が 180 度転回していた。すなわち、この子は映画の中で純粋に造り上げられた架空の人物ではなく、私が知っている実在の子ども

をモデルに形象化されたのではないかということだ。

とはいえ、たまたま見た映画でそんなことが起こり得るものだろうか。半信半疑で続きを見ていたら……。

「おまえ、あいつに何言った？」

外に佇む教師には、こんな声とともに、家の中からどすんどすんという鈍い音が聞こえてくる。だからといってドアをノックすることもできず、担任はそのまま引き返す。



これで私は確信した。全く同じなのである。いくらなんでもここまで一致するはずがない、と思ってこの映画の原作小説を探して読んでみると、小説の作者・中脇初枝の出身地が、私の知っている子どもとその家族が住む地と重なっている。

この子は本当は……

これで映画の見方が変わってしまった。映画のストーリーと実在していた子どもの経過を比べながら、固唾をのんで見入ったのである。

では、私の知る子どもは、どのような子どもで、どんな事例だったのか。先にその点について述べておこう。

やはり小学生の彼は、映画と同じく実母と内縁男性と 3 人で生活していたが、映画と同様「5 時まで帰ってくるな」と言われていた。

「おまえは友だちが少ないから、5 時までは友だちと遊んで来い」

こう言われて、彼は雨の日も風の日も、夏休みも土曜や日曜も学校の校庭で過ごし、お腹をすかせ、教師にラーメンを食べさせてもらう。



そしてある日、やはり雨の中にいる彼を見かねた教師が付き添い、家まで送って行くのである。

男性は無職で一日中ゲームなどで過ごしていたのだが、子どもが家の中に入った途端、「遊んでこいと言っただけで、帰るなど言っていない。おまえは教師に嘘ついた」と激昂し、子どもを持ち上げて畳に落としてしまう。

教師がどすんどすんという音を聞くところも映画と寸分違わないが、実在の子どもは、この後さらに責められ、1 か月もしないうちに、虐待によって死亡するのである。

時計

私がなぜこの子どもを知っているのかというと、この事例について、当該自治体が行った死亡事例検証委員会に委員として参加し、詳細な検討を行ったからである。

それはさておき、幸いにしてというべきかどうか、フィクションである映画では、希望の灯が仄見える結末となっている。

というのも、当の子どもがいつも佇んでいた校庭で、担任教師がふと見上げると、視線の先には校舎に備え付けられた時計があり、担任は、そのとき初めて気づくのである。

「そうだったんだ。あの子はいつもこの時計を見て、帰宅できる時刻を計っていたんだ」

実際の事例では、彼の死後、やはり教師が校庭のその場所に立ち、子どもと同じ目線で時計を見上げ、彼を救えなかったことを悔やむのだが、映画では、時計を見た担任が、息せき切って彼の家まで走り続け、やがて歩を緩め、玄関先に到達すると大きく深呼吸し、力強くドアをノックする。映画はここでエンディングを迎えるのである。

現実とフィクションと

ただし、映画を見終わった私には複雑な思いが残った。なぜとって、映画の中の子どもは、もはや私の目には、フィクションではなく死亡した実在の子どもにしか見えなくなっていたからだ。

死亡事例の検証では、亡くなった子どもの命を無駄にしないため、そこから何を学ぶかが問われていたが、映画は、(私に言わせれば) 過去に遡って子どもを死の淵から救い出し、生かすことで希望を語ろうとしているように思える。つまり、ラストシーンは、生前の彼が、今を生きる私たちに託した未来の姿として描かれたものではなかったのだろうか。

現実とフィクションとはもちろん違うのだけれど、両者が混然一体となってしまった私には、この映画が、亡くなった彼を供養する作品に思えてならないのであった。

* 2015 / 日本

* 鑑賞データ 2015/07/21 京都シネマ

* 公式 HP <http://www.iiko-movie.com/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/38297>

第 1 回	プレシャス
第 2 回	クロッシング
第 3 回	冬の小鳥
第 4 回	その街のこども
第 5 回	八日目の蟬
第 6 回	いのちの子ども
第 7 回	ラビット・ホール
第 8 回	サラの鍵
第 9 回	少年と自転車
第 10 回	オレンジと太陽
第 11 回	孤独なツバメたち
第 12 回	明日の空の向こうに
第 13 回	旅立ちの鳥唄
第 14 回	くちづけ
第 15 回	もうひとりの息子
第 16 回	メイジーの瞳
第 17 回	ファイ
第 18 回	思い出のマーニー
第 19 回	ショートターム
第 20 回	真夜中のゆりかご

* 題名を click
すると本文へ
ジャンプします。



の中の

子ども
たち

第22回 エール！

ーマンネリが感動を呼ぶー

川崎 二三彦

ストック・シチューション

本作、何か深く考えさせられるとか、新しい発見があったというようなことはなかったけれど、「ああ、映画館に足を運んで良かったな」と素直に思えた映画だった。ただし、どこが良かったのか、なぜそれが良かったのかを書き付けようとした途端、それがほとんど無意味なことだと気づき、書くことが何もない。何しろストーリーは単純明快で、感動したといっても、見終わってみれば結末はほぼ予測できるものでしかなく、それ以上何かを付け加える必要がないのである。

＊

そうして考えていて、ふと思い出し、書棚から引っ張り出した本がある。井上ひさしと平田オリザが対談した「話し言葉の日本語」(小学館)だ。読んだのは、もう十数年前のことだけれど、記憶を辿って改めてページをめくり、井上ひさしが語っていた次の一節を探し出した。

「外国には『ドラマドクター』という人がいます。その戯曲のどこが悪いかを指摘する人です。彼らがよく使うボキャブラリーのひとつに『ストック・シチューション』という言葉があります。日本語に訳すと、『お決まりの状況』。人類にはいままで何千年もかかってためてきた、おもしろい人間関

シチューションです。たとえば、『三角関係』とか『偶然と誤解』とかいったものがそうです。野望に燃える若者が出世の階段をかけのぼるというのもそうです」

井上ファンである私は、彼こそ、こんな、いわばマンネリの極致のようなストーリーと決別し、奇想天外な発想の小説や戯曲をたくさん書いた、また書こうとした作家だろうと考えていたのだけれど、実は違う。対談の続きを見てみよう。

「このようなパターン化された人間関係や出来事を、文学や演劇が引き継いで再創造していきたいというのが、僕の基本的な姿勢です」

なんだ、マンネリを否定するのではなく、それを前提にして作品を生み出していたのかと驚いていたら、それは何も井上ひさしに限られたことではないという。

「チャーホフの『三人姉妹』は愛の三角関係ですし、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』は偶然と誤解でできている(笑)」

成功の秘訣

この部分を再読して、ようやく分かった。本作のパンフレットには、「耳の聴こえない家族の中、唯一聴こえる少女には歌の才能があった」「少女の夢と家族への愛を乗せた歌声が起こした、最高の奇跡とは？」などといった惹句が踊っていて、「簡単には起こりそうもない物語なんですよ」とささやいているけれど、実はこれ、何千年も前からある「お決まり」の映画だったのである。

ただし、そんな映画に人が感動するには、条件がある。今回は井上ひさしに度々お世話になるのだけれど、先の対談で、彼が戯曲を書く前につくるたくさんのノートのことを尋ねられ、こんなことを言う。



係や出来事がある。これがストック・

「この紙に書かれたものは、あくまでも、ただのストーリーですから、これを立体に組み上げるプロット作業が必要になります」

加えて、こんな発言もある。

「戯曲を書こうと思ったときに、(中略) テーマや思想や構想を最初にもって書き出すと、必ずと言っていいほど、失敗します。いや、これは、ほんとうです」

普通のコメディ

「よくできたシナリオ、俳優達の熱演に支えられながら、ラルティゴ監督は見事に私たちを楽しませ、さらには感動さえ与えてくれる」

フランスの映画雑誌「ポジティブ」は、本作品をこのように評したらしいが、今まで述べてきた井上ひさしの蘊蓄に耳を傾けるならば、この評はなるほどなぞける。

MovieWalker などで事前に情報を得たとき、もしかするとお涙ちょうだい式の安っぽい映画かも知れないと、実は最初敬遠していたのだけれど、それが裏切られ、「ああ、見て良かったな」と思った理由は、ストーリーの見事さなどではなく、シーンの一コマ一コマが立体的で楽しく作られていること、そして何より、人類が「いままで何千年もかかってためてきた、おもしろい人間関係や出来事」が繰り返されることで、安心していられた、つまりは、自然と湧き上がる期待感をそのまま満足させ、見たかったとおりに展開する映画だったからにほかなるまい。

この映画、キーワードはあくまでも



「聴覚障害」だ。ところが、不思議なことに、この手の映画で常に生じる「障

害問題」だとか「障害者」を考えさせられ状態がなく、いとも簡単にそこから自由にしてくれる。いわば、普通のコメディに過ぎないのである。好感が持てるのは、恐らくこの点にあるのだと思う。

とりわけ、父の役どころがツボにはまっていて可笑しい。

「私が当選したら、あなた達のような障害者を全力で支援します」

などとおべんちゃらを言う村長に、「クソ野郎」と(手話で)毒吐き、周囲の反対を押し切って自ら立候補するなんて痛快だし、娘が歌の才能を見いだされ、家を離れてパリの音楽学校に行くという話が持ち上がると、急なことに母が狼狽し、「家族の手伝いは？」などとやり合う中で、迷う娘に父が答える。

「おまえなしでも平気さ」

考えてみれば、どの家族だって、多かれ少なかれ変化には痛みが伴うものだ。この家族では、唯一耳の聴こえる娘が、外部とのコミュニケーションを一手に引き受けていたのだから、確かに不便をかこつのはやむを得ない。けれど

「だからといってそれが何だ」

「どこの家でもあることだろ」

こんな雰囲気、いいのである。

* 2014/フランス

* 鑑賞データ 2015/11/03 京都シネマ

* 公式 HP <http://air-cinema.net/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/39336>

- | | |
|------|---------------------------|
| 第1回 | プレシャス |
| 第2回 | クロッシング |
| 第3回 | 冬の小鳥 |
| 第4回 | その街のこども |
| 第5回 | 八日目の蟬 |
| 第6回 | いのちの子ども |
| 第7回 | ラビット・ホール |
| 第8回 | サラの鍵 |
| 第9回 | 少年と自転車 |
| 第10回 | オレンジと太陽 |
| 第11回 | 孤独なツバメたち |
| 第12回 | 明日の空の向こうに |
| 第13回 | 旅立ちの鳥唄 |
| 第14回 | くちづけ |
| 第15回 | もうひとりの息子 |
| 第16回 | メイジーの瞳 |
| 第17回 | ファイ |
| 第18回 | 思い出のマーニー |
| 第19回 | ショートターム |
| 第20回 | 真夜中のゆりかご |
| 第21回 | きみはいい子 |

* 題名を click
すると本文へ
ジャンプします。



第23回 サウルの息子

—愛か、狂信か？—

川崎 二三彦

顔の映画

カンヌ国際映画祭グランプリをはじめ、数々の賞を獲得したというから、とにかくすごくいい映画なんだろうと期待して出かけてみた。

と、どうであろう、映画は冒頭、主人公の顔を大写ししたのはよいとして、場面が変わり、ストーリーが展開しても、画面の大半はいつまでも主人公の顔に占められていて、背後の情景がどうなっているのか、今どんな状況であるのかがよくわからない。おかげで、客席の私は次第にストレスが強くなっていく。

アウシュビッツ。



主人公サウルは、囚人としてガス室に送られる順番を待つ身だが、今はゾンダーコマンドとして働いている。耳慣れぬ言葉だが、ゾンダーコマンドとは、同胞であるユダヤ人の死体処理に従事する役を負わされた特殊班のことらしい。いずれ誰もが殺されるとしても、彼らの順番はいくぶん遅くなるというのだけれど、死体を運び出し、焼却し、遺灰を運び出して川に捨てるという仕事は過酷というほかない。

大写しの顔の合間に現れる彼らの様子や、断片的に知らされる彼らの生活ぶりを垣間見えていて、私にも、ようやくカメラワークの意図が見えてきた。簡単に言えば、観客にわざと状況を俯瞰させないのである。そしてそれ

は、とらわれの身となって明日の命も定まらないユダヤ人の置かれた境遇を否応なく想起させる。

「どうなっているんだ、もっと説明してくれ」

思わず湧き上がった内心の声が、そのまま彼らの叫びに繋がっていくカメラワークの見事さが、受賞の理由だったのだろうかと推測した。

それにしても、全編アップで出続けるサウルの一挙手一投足が観客を惹きつけなければ決して成立し得ない作品だというのに、彼を演じたのが、目下長編小説を執筆中の詩人だというから脱帽。

息子はいない？

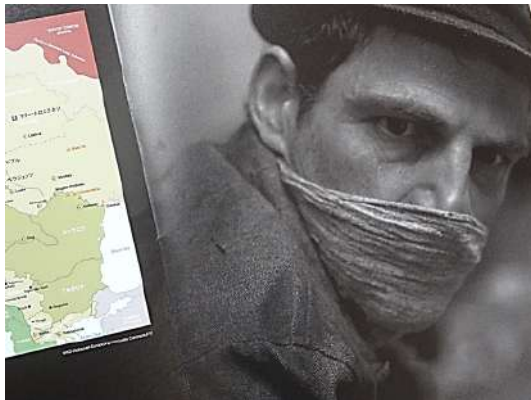
ところで、ガス室送りにされても、稀には死にきれず、生存している者がいるらしい。むろん、そうであっても死体処理する際には発見されるし、発見されれば、軍医によって直ちに殺害され、解剖に回される。物語は、そうして生き残った一人の少年を、サウルが目撃したところから始まる。

ゾンダーコマンドは、その特殊な役割から、アウシュビッツの中でもある程度の自由が与えられているらしく、サウルは、殺害された少年が運ばれた部屋に赴き、担当の医師に解剖しないでほしいと依頼する。このあたりから、ようやく私は、この少年がサウルの息子だと確信する。とはいえ、解剖医のところへ行くだけでも無謀な行為だから、医師は驚き、当然のことながら、彼の希望を拒絶する。

「私も囚人なんだ」

ナチによるアウシュビッツの管理は、効率を極めている。囚人が囚人を監視し、囚人が囚人をガス室に誘導、後始末も囚人が担う。だから、囚人の解剖も囚人医師が行い、ナチは結果について報告書を要求すればよい。映画では（そして現実でも）、「部品」と

という言葉が囚人を指しているらしく、それがごく普通に飛び交うさまに、却って戦慄を覚えてしまう。



それはさておき、依頼を拒否されたサウルは、ならばと、後刻あらためてその場に足を踏み入れ、遺体を持ち出してしまふのである。

彼は一体何をしたいのか。実は、ユダヤ教の教義に従って、息子をきちんと埋葬するつもりなのだ。

「そのために、これほどの危険を？」
無信仰の私には理解できないが、仲間のゾンダーコマンドまでも危険にさらしながら、追悼の祈りを捧げるべくラビ（ユダヤ教の聖職者）を探し求めて求めて走り回るサウル。

そんな展開が続く中、見ている私が混乱する台詞が語られる。

「お前には息子はいないじゃないか」
「一体どういうことだ？ 息子じゃないのか？」

「妻の子じゃない」

サウルは控えめにこう呟くけれど、わが子愛するが故の行動だと考えていた私には、もう何がなんだかわからなくなってしまった。

絶望の檻で

ところで、恥ずかしながら本作を観るまで何も知らなかったのだけれど、アウシュビッツ（ビルケナウ強制収容所）の歴史上、たった一度ではあるが、武装蜂起があったという。1944年10月7日、ゾンダーコマンドの集団が3人のナチの兵士を殺害して遺体焼却炉を爆破し、数百人の囚人が脱出したというのである。映画はそれを描いており、サウルもその一員だった。

とはいえ、蜂起に勝算があるはずも

なく、いずれは死す運命にあることは、誰もが自覚していただろう。Xデーが迫る中、サウルもさまざまな任務を果たすよう促されるが、彼はあくまでも少年の埋葬にこだわり、任務よりも優先させる（ように感じられた）。

狂信？

という言葉が私の脳裏をかすめ、わりきれなさが解消されないままので、映画館を出てからも、しばらく彼の行動の意味を考え込んでしまった。

そして思う。アウシュビッツに移送されたユダヤ人は、まさか彼らが「部品」と呼ばれ、町工場のありふれた作業のようにベルトコンベア式に次々とガス室に送られ、殺害されて燃やされ、灰となって川に捨てられるなんて思いもよらなくとも、それに従事させられるゾンダーコマンドは、そこが絶望の檻であることを最も痛切に理解している人たちであろう。

では、大量殺人に従事させられ、明日は自身も死ぬ身の彼らが、今日を生きる意味は何なのか。死した者を生かし、自らが生きた証を確認する唯一の行動が、息子（と信じる少年）を手厚く埋葬することだったのではないだろうか。

生の究極の意味が、究極の殺害現場で浮き彫りにされた映画、それが本作品なのかも知れない。

* 2015/ハンガリー

* 鑑賞データ 2016/02/22 京都シネマ

* 公式 HP <http://www.finefilms.co.jp/saul/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/40106>

第1回	プレシャス	* 題名を click すると本文へ ジャンプします。
第2回	クロッシング	
第3回	冬の小鳥	
第4回	その街のこども	
第5回	八日目の蟬	
第6回	いのちの子ども	
第7回	ラビット・ホール	
第8回	サラの鍵	
第9回	少年と自転車	
第10回	オレンジと太陽	
第11回	孤独なツバメたち	
第12回	明日の空の向こうに	
第13回	旅立ちの島唄	
第14回	くちづけ	
第15回	もうひとりの息子	
第16回	メイジの瞳	
第17回	ファイ	
第18回	思い出のマーニー	
第19回	ショートターム	
第20回	真夜中のゆりがこ	
第21回	きみはいい子	
第22回	エール！	

映画 の中の 子どもたち

第24回 スポットライト —ジャーナリストの魂—

川崎 二三彦

気になるニュース

かつて私は、全国児童相談研究会(児相研)のメーリングリストに、「気になるニュース」を見つけては不定期に投稿していた。かれこれ 10 年以上前にさかのぼるだろう。おもには、児童相談所関係の出来事であったり、虐待がテーマの事件などである。

本作品を見て、あらためて過去のデータを調べてみると、2007 年 7 月 17 日 AFP による「ロサンゼルス聖職者の児童性的虐待事件、805 億円で和解」という記事を投稿していた。次のような内容だ。

「米国最大のロサンゼルス大司教区の司祭らが数十年間にわたって信者の子どもたちに性的虐待を行っていたとされる事件で、同大司教区が被害者らに和解金 6 億 6000 万ドル(約 805 億円)を支払うことで原告側と合意したことが 16 日、明らかになった。

被害者 508 人を代表する原告側と被告の大司教区側の双方の弁護団が同日、ロサンゼルス高裁に出廷し和解を確認した。これにより、聖職者が関係したスキャンダルとして 2002 年にこの事件が発覚して以来、5 年間におよんだ裁判に終止符が打たれた」

この記事に対して、私は次のようなコメントを書いていた。

「こんな事件があるのかと驚いた」

「ほんとにこんな高額の賠償金を? 誤りではないかと、思わず再確認した」

コメントを読み直す限り、こうした事件があると知ったのは、このときが初めてのことであろう。とはいえ、聖職者が性的虐待行為を行ったというので驚いたわけではない。事実、この報道に接する 2 年前には、当時私が勤務していた児童相談所管内で、キリスト教系新興宗教団体の牧師が地位を乱用、信者の少女 7 人に対して計 22 件の性的暴行を繰り返したとして、求刑どおり懲役 20 年の刑が確定もしてい



る(聖神中央教会事件)。

問題は、こうした性犯罪が、長年にわたり多数の聖職者によって全米各地で、否、全世界で行われていたということだ(上の写真参照、ここに記載の地域すべてで犯罪が行われていたという)。

長い道のり

さて、こうした事件が自然に明るみになることは、通常起こり得ない。特に、世界中のどこであっても大きな影響力を持つカトリック教会組織の問題となれば、なおさらだろう。では、こうした事件はどのようにして発覚したのか。正直言って、当時の私はそこまで関心を払っていなかったのだが、事件が表沙汰になるまでには知られざるドラマがあり、それをまざまざと示してくれたのが本作品であった。アメリカ東部ボストン市で発行されている日刊地方紙ボストン・グローブのスクープを題材にした映画である。

教会は、聖職者による子どもへの性犯罪に気づくと、当人を病氣療養や休職扱いし、次いで片っ端から転属させる。しかし、密かに行われるこの人事異動は彼らを罰するものではないから、必然的に広汎な地域に被害児童を広げることには貢献するだけであった。

本スクープが掲載された紙面のタイトルが、映画の題名にもなった「スポ



「スポットライト」であり、記事を担当するスタッフは、陰に陽に妨害する協会に屈せず、極秘のうちに調べ上げ、動かぬ証拠を一つ一つ積み上げつつ、個人の不幸事ではなく、組織犯罪であることに焦点を当てて確認作業を続けていく。途中、9.11 テロも発生して、一時は全員がそちらの取材に動員されるなど、さまざまな困難があっても、本記事はそれを乗り越え、ついには一面トップを飾ることとなるのである。

長い道のりだったというほかないが、翻って考えると、性被害を受け続け、トラウマを抱えているのに泣き寝入りを余儀なくされ、懊悩していた人にとっては、もっともっと長い時間であったと言える。

波紋

記事が出たあと、スタッフは、読者からどんな反応があるのか不安と期待の入り混じった気持ちで受話器を握る。何しろグローブ紙は、定期購読者の 53%がカトリック信者なのだ。

待ち受けているところへじゃんじゃん架かってくる電話の内容は、しかし私の想像とは違っていた。

「協会を誹謗して怪しからぬ」

「勇気を出してよくぞ書いてくれた」

こんな反応が交錯して電話回線がパンクすると私は思っていたのだが、実際は、

「今まで誰にも黙っていたけれど、実は……」

「私も過去に……」

記事を契機に、これまで堪え忍んでいた人たちが、この記事によって勇気づけられ、記者を信頼して次々に自らの被害を告白してきたのである。「ス

ポットライト」は、その後ボストン教区にかかわる 600 以上の関連記事を掲載し、ピューリッツァー賞も獲得する。

生きられなかった人も？

とはいえ、彼らも自ら顧みて考える。というのは、聖職者による性犯罪には以前から気づいており、単発的には記事にもしていたのである。だから言う。

「私たちは暗がりの中を歩いていた。それが間違いだとは知らずに」「光が差し始めて、間違いに気づくのだ」

反省、怒り、正義感、使命感、ジャーナリスト魂、etc. さまざまな感情が混ざり合って闘う力が引き出されて初めて、光が差し込み、無理だと諦めていたことも、結実するのである。

と、ここまで思いつくまま書き連ねてきて、ふと気づく。私はこの映画をフィクションだと思わずに見入っていたということに。ただし、一言弁解させてもらうなら、それこそが、事実の確かな裏付けを力にした本作品の魅力だと言えよう。

それはさておき、映画の中で重く受け止めざるを得なかったのは、成人した何人もの被害者が、問われるままに苦難の道を語った後で付け加える言葉だ。

「でも、私はまだいいんです。生きていますから……」

* 2015/アメリカ

* 鑑賞データ 2016/05/02 TOHO シネマズ二条

* 公式 HP <http://spotlight-scoop.com/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/40389>

第 1 回	プレシャス	* 題名を click すると本文へ ジャンプします。
第 2 回	クロッシング	
第 3 回	冬の鳥	
第 4 回	その街のこども	
第 5 回	八日目の蟬	
第 6 回	いのちの子ども	
第 7 回	ラビット・ホール	
第 8 回	サラの鍵	
第 9 回	少年と自転車	
第 10 回	オレンジと太陽	
第 11 回	孤独なツバメたち	
第 12 回	明日の空の向こうに	
第 13 回	旅立ちの島唄	
第 14 回	くちづけ	
第 15 回	もうひとりの息子	
第 16 回	メイジーの瞳	
第 17 回	ファイ	
第 18 回	思い出のマーニー	
第 19 回	ショートターム	
第 20 回	真夜中のゆりかご	
第 21 回	きみはいい子	
第 22 回	エール!	
第 23 回	サウルの息子	